
月下の恋人たち

鏡 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の恋人たち

【Nコード】

N4397K

【作者名】

鏡 香夜

【あらすじ】

「かつて一族が手にかけた人間たちの冥福を心から祈ろう」
人間との共存の思想を持つ、吸血鬼^{ヴァンパイア}ランドル。
人間の女性、フィリアとの出会い。そして、彼女への思い。

「平凡な生活が変わるとは思わなかった」
過去の出来事に縛られ、愛することに臆病になってしまったフィリア。
ア。

突然、現れたランドルの存在は、彼女に何をもたらすのか……。

2人が語る物語が始まります。

ランドル1 (1)

過去において、わたしたち一族が人間にもたらしてきたこと。

それは伝説となって残っている。恐ろしく忌まわしい事実。わたしは命を落とした全ての人間たちの冥福を心から祈ろう。

わたしの名はランドル・ウエルボルン。人間の言葉で言うヴァンパイアだ。

もつとも、人間のヴァンパイア像とわたしたちは必ずしも一致しない。伝説が伝説に過ぎないこともまた多いのだ。

そもそも、全てのヴァンパイアが人間に危害を加えようと企むわけではない。

現にイギリスの夜を治めるトレヴィス・C・ケントドリックは、人間との共存の思想を掲げている。

彼は命の糧を与えてくれる人間に対して、もつと敬意を払うべきだと考え、暴力と争いを好む同族たちと一線を画していた。

わたしの父ナイトもまた、人間に対して深く興味を持っていた。彼が人間とジョークを交わしたり、彼らの肩を親しげに叩いたりするのをわたしは見てきた。

トレヴィスの思想の表れる教育。父親という環境。そして何よりも、わたし自身が幼い頃、一ヶ月にわたって、わたしの正体を知る人間と暮らしたという事実。

わたしが仲間達の中で、もつとも人間に好意を持つ者になったとしても不思議でも何でもないことだろう。

そう、わたしは人間を愛していた。彼らにまぎれて過ごす時間が好きだった。わたしは多くの人々から少しずつ血を分けてもらい、生きていた。

伝説のヴァンパイアに比べれば、ひどく軟弱に思えるかもしれない。

だが、わたしは満たされていた。本当に満足していた。

そして出会った、とある人間の女性。

まさしく、これは運命だったのかもしれない。その時のことをわたしは鮮やかに思い出せる。

その時、わたしはネズミの姿をしていた。ヴァンパイアとして初歩的なミスを犯したために。

聖夜にネズミに姿を変える……。

わたしはわたしたちの言う“呪い”にかかり、元の姿に戻れなくなってしまったのだ。

わたしは父を頼った。父の血に頼り、開放の時、ハロウインの夜を待とうと考えた。

だが、問題が起こった。父がイギリスを離れる任を負ったのだ。

『とてもネズミであるお前を連れてゆくわけには行かない』

それが父の見解だった。

ならば、どうするのか。誰にわたしを任せるのか。

わたしたちは話し合い、そして、結論を得た。

エリーゼの元へ身を寄せること。彼女こそ、かつて少年だったわたしと一ヶ月に渡り暮らした人間だった。

わたしは彼女の姿を思い返した。懐かしい思い出が胸をよぎった。彼女との再会を考えると、いやがうえにも期待が高まった。

わたしは知らなかったのだ。時の流れの感覚が我々と人間とでは違うということ。

そして、わたしの父ナイトもまたそれを忘れていた。

八月の終わり、比較的涼しい風が吹いていた夜。

ロンドンのダウンタウンにある古いマンションから全ては始まった。

わたしは小さなバスケットに入れられていた。聞こえるのはわたしの運ぶ父の足音。感じるのはリズムある横揺れ。そして、時折見えるのは淡い裸電球の光だった。

天井の網目を通して差し込んでくるのだ。

ここがエリーゼのマンションだとすぐに分かった。匂いが感覚が教えてくれた。

ナイトがどこを通り、ドアへ向かっているのか容易に想像できた。だから、バスケットが床に置かれた時も驚きはしなかった。続いて聞こえるノックの音。

だが、返事はない。人の気配もない。人の残り香だけが香る。エリーゼは留守のようだった。

バスケットの天井が開けられる。巨人のような父が座り込んでわたしを見下ろしていた。

「さて、どうしたものかな。飛行機の出発まで時間がない」

腕時計を見、それからわたしにそれを示して見せた。針は九時四十分を指していた。空港までの時間を差し引けば、ぎりぎりといったところだ。

彼は数秒しかめ面をして考え込んだ後、おもむろに立ち上がった。ポケットから手帳を取り出し、一ページ引きちぎる。ドアを机代わりに何かを書き始めた。

その素早さと角度の悪さが災いして、わたしには何を書いてあるのかまるで分からなかった。

メモをわたしに被せる。いまいましくかさかさ音を立てるそれから顔をのぞかせた時、見えたのは父の後ろ姿だった。

『親父！』

わたしはいくら経ってもなじめないネズミの声で呼びかけた。父は立ち止まり、振り返ってからにっこりと笑った。

「エリーゼを待つんだランドル。きつとすぐに彼女は帰ってくる」
そうして、再び背を向けて彼は歩き出した。

わたしはバスケットの縁にかけた手を下ろし、ふてくされるしかなかった。足音は遠ざかっていく。

エレベーターのベルが鳴ったのと父の足音が止んだのは同時だった。

「失礼」と父の声。

「あつ、すみません」

若い女性の声。

エレベーターの扉が閉まった。モーター音と重なって足音が近づいてくる。柔らかい足音だ。どんな隣人だろう。わたしは興味をひかれた。

足音はまっすぐこちらへ向かってくる。

わたしの入っているバスケットが彼女を引きつけたのだろうか。女性はバスケットの脇で止まった。中を覗き込み、そしてわたしと目が合った。彼女はギョツとして、一步後退りした。そして、あらためてわたしを見つめる。

わたしも彼女を見ていた。

パステルカラーのキツチリとしたスーツ。薄い化粧。見事に編みこまれた髪。表情の硬さが彼女を余計に神経質そうに見せていた。

腰を落とした彼女の服や髪からはうつつすらと酒の匂いがした。そして、多くの人間の匂いも。

もっともそれは染みてしまった匂いに過ぎなかった。彼女自身からは何の匂いもしない。わたしの横にあるメモを取ろうと、彼女が手を伸ばしてきたとき、そう気づいた。

指がわたしの体に触れそうになる。温かく血に満ちたそれをわたしはうつつと見つめた。

もし、自制をきかせていなければ、その手首に咬みついていたかもしれない。

彼女はメモを読み流した。透ける文字から内容を読み取るうとしたが無駄だった。それより早くメモはポケットにしまわれた。

「まったく友達が多いっていうのも考え物よね」

エレベーターを振り返り、溜め息混じりに彼女は言った。

わたしはようやく落ち着きを取り戻した。彼女がわたしを部屋に入れる気だということに気づいたからだ。

バスケットは持ち上げられ、ドアは開かれた。

わたしは、かつてエリーゼと過ごした部屋に再び足を踏み入れることになった。そこはわずかに過去の面影が残っていた。それを目の端に捕らえ、わたしはこれからのことを不安のうちに考えた。わたしはこれからどうなるのだろう。わたしはこれからどうすればいいのだろう。

横にいる彼女を見上げ、わたしは困惑するばかりだった。

ランドル1 (1) (後書き)

ジャンルで言えば、ヴァンパイア・ロマンス物になるのでしょうか。

あまり得意な分野ではないけれど、ロマンティックな感じを出せればいいなと思っています。

ホラーもなく、スプラッタ表現もない予定です。

よろしくお付き合いください。

ランドル1 (2)

かくして、わたしと彼女との生活が始まった。

わたしの不安は的中した。彼女がこの部屋の主だった。エリーゼはいなかった。

そして、わたしの正体を彼女は知らなかった。これは憶測であるが、間違いはないだろう。彼女はわたしにチーズやパンを与えようとしたのだから。

そして、わたしを「ランディ」と親しみをこめて呼ぶのだ。それはエリーゼが少年だったわたしに付けた愛称だった。

いったい父はどんなメモを残したのだろう。わたしは首をひねった。

少ない時間の中で書き残したことが幸いしたには違いないのだが、余る時間の中で書いたものなら、それはわたしを危険にさらすことになっただろう。

とにかく彼女はわたしに優しく接してくれた。

陽光を遮るには十分な、布の覆いのついたダンボールの巣箱を与えてくれた。わたしは昼間その中で眠りについた。彼女がそれを邪魔することは決してなかった。

仕事が休みらしい時でさえ。わたしが目を覚ますのを待っていてくれた。

彼女はいつも追い詰められた獣のようだった。張り詰めていた。

夕方、仕事から返ってきた彼女は、見ていてかわいそうなほどだった。

部屋のドアを閉めて、やっと彼女は開放されるのだ。ふっと息をつき、きつちりと結び上げた髪をすぐさまほどく。

肩を覆う髪が彼女の頬を縁取る。窓のそばの椅子に座った彼女を、太陽の名残が温かく包むのを何度も見た。淡い光にもかかわらず、ひりひりと痛む目も気にならなかった。

オレンジに近い赤い光の中で、金色に縁取られながら波打つようなラインを描く髪。そして彼女は、わたしの視線に気づき、振り返るのだ。

わたしはその瞬間を愛した。部屋に入ってきたときの彼女とはまるで別人だ。古く美しいポートレートのようだった。

どうして、こんな美しい髪を編みこんでしまうのだろう。わたしは疑問に思い、残念に思った。

次第に彼女に惹きつけられていくのを感じた。

柔らかくウエーブした栗色の髪。紅茶の色そっくりな瞳。東洋の血が混じっているのではないかと思うようなきめ細かい白い肌。そして、彼女の笑顔ときたら。

わたしはそれを見るためにおどけて見せるのだ。

チーズをおもちや代わりに振り回したり、彼女の腕をよじ登ったり、豊かな髪に鼻先をもぐらせたり。思いつく限りのことをやってみた。

彼女はそのたび、わたしの頭を指でなでながら、くすくす笑うのだ。

「いたずら好きのランディ」……と。

それはわたしが小さな体に閉じ込められているということを忘れさせてくれる瞬間だった。

わたしがヴァンパイアであることも。

だが、それは一時的な忘却でしかなかった。

わたしは狩人だった。常に血に飢えた存在だった。

わたしは彼女が眠りについた夜中、巣箱を抜け出すのだ。ネズミらしく台所の隅に潜り込むのだ。

そこにはわたしの仲間たちがいた。毛むくじやらの犠牲者達が。

わたしは素早く飛びかかり血を奪うのだった。

もちろん好みの味などではなかった。わたしが常に欲するのは人間の血だった。

それでも眠っている彼女を襲うなどできるわけがなかった。彼女

の安らかな寝息を聞いていると安らいだ。少女のような寝顔は保護欲をかき立てた。

わたしは彼女を守りたかった。彼女を苦しめる全てのものから。しかし、わたしはネズミでしかなかった。悪夢にうなされ、泣きながら飛び起きる彼女を見ているだけだった。

彼女にとつてわたしはペット……守るべきものなのだ。

わたしは無力だった。それを思い知らされた。

ある晩のことだ。わたしは床の上で小さなボールに戯れて遊んでいた。彼女がわたしへとボールを転がし、わたしがそれに飛びつくという形だ。

音がした。聞きなれない耳障りな音だ。

わたしは首をめぐらせ、発信源を見やる。それは電話だった。

彼女の部屋に住み始めてから、初めて耳にした呼び出し音。

彼女は慌てて受話器をとった。まるでそれが逃げてゆくものかのように。

呼び出し音が途切れる。

「はい、もしもし……」

受話器から声が漏れてくる。低い……男の声だ。

「ええ、娘のフィリアです」

わたしはこの時、初めて彼女の名前を知った。彼女と出会ってから三週間は過ぎた、この時初めて。

改めてフィリアを見上げる。彼女は微かに震えているようだった。

「でも、そんな……私には……」

相手はひどく怒鳴り散らしている。

わたしにも言葉が聞き取れるほどだ。柄の悪い脅しつけるような言葉。

フィリアの体が凍りついたかのように動かなくなった。男が声高く罵ったのだ。

そうして電話は切れた。

フィリアは大仕事のように受話器を戻し、その場に座り込んだ。

彼女の顔は色を失い、瞳には霞がかかったようだった。

わたしはすぐさま傍へ駆け寄った。彼女を力づけようとした。笑顔を取り戻させようとした。

無駄だった。

わたしの声はネズミの声でしかなかった。

彼女はわたしを見ようとはしなかった。

わたしはただ彼女が泣き出すのを見ているしかなかった。床に手をつき、髪が流れるままにしている彼女を……。

わたしはちっぽけなネズミでしかなかった。

彼女がその日、わたしを振り返ることはなかった。ベッドの中で激しく泣き続けていた。

疲れ果て、自然な眠りが彼女を誘うまでそれは終わらなかった。

まったく情けない気分だった。わたしは元の姿に戻りたかった。

彼女を慰め、抱きしめることができたなら……。

わたしは苛立ちを覚えた。

ハロウインを迎えるまでこの姿のままなのだ。一ヶ月以上も先のことだ。

それまでわたしにできることといえば、祈ることだけだった。

“彼女を悲しませることが起きませんように……”

わたしは空腹に身を任せた。

ネズミたちしてみれば、恐怖の一夜だったに違いない。

その時のわたしは、このマンション全てのネズミを食い尽くす勢いだったのだから。

ランドル 1 (3)

ハロウィンから数えてちょうど一ヶ月前の夜、父ナイトが訪れた。それは突然の訪問だったが、驚きはしなかった。ナイトの性格を知るものなら分かるだろう。彼には予定などないのも同じなのだ。彼は外から窓ガラスをコツコツと叩いていた。わたしは駆け寄り、それをやめさせなければならなかった。

寝入ったばかりのフィリアを起こしかねない。ナイトは外の壁に貼り付くように立っていた。

『親父……』

わたしは囁いた。

黒い上着に身を包み、トパーズ色の瞳をしたナイトは、さながら黒猫のようだった。彼は窓に顔を寄せて言った。

「迎えに来たんだ、ランドル」

わたしは後ろを振り返った。シーツのすれる音がしたのだ。フィリアは寝返りをうっただけだった。

「エリーゼには後から連絡を取ればいい。行こう」
わたしは後退り、首を振った。

『エリーゼはここにはいない。いるのはフィリアという娘だけだ。だけど、今ここを出るつもりはない』

わたしは初めて口にする“フィリア”の名前の響きを味わった。不思議な感覚だった。彼女がひどく身近に感じられた。

ナイトの瞳が見開かれた。琥珀色の瞳が色を濃くした。彼は眩暈でも起こしたように、ゆっくりとまばたきをした。

「まさか……お前、彼女に惚れたんじゃないだろうな」

その言葉の衝撃。わたしはわたしなりに彼女に対する気持ちを考えていた。だが、言葉にすると、ここまで違うとは。それはまるで罪のようにわたしを押し潰そうとしていた。

「友人になるのはいい。だが、惚れるなんて。行こう、ランドル。」

ここから出るんだ。手遅れになる前に……」

それは受け入れられないことだった。わたしは頑として首を振った。

『ハロウィンが来るまではここにいます。彼女にとってわたしはペットなんだ。急にいなくなれば、悲しみもするだろう』

「早いか遅いかの差じゃないか！」

ナイトは食い下がった。押し殺した声だったが、その口調は激しかった。彼が声を荒立てることなど、久しくなかったことだったが、わたしも折れなかった。

『ハロウィンが来るまでは……』

わたしは繰り返した。

彼は窓を突き破らんばかりに顔を近づけ、わたしを睨みつけた。

わたしは瞬きもせず、彼を見返した。

やがて彼は顔を引いた。後ろから差す月光が彼の表情をより苦渋に満ちたものに見せた。

先に視線をそらしたのはナイトのほうだった。彼はフツと息をついた。肩をすくめ、驚いたことに微笑みをもらした。そして、自分を納得させるようにうなずいた。

「ハロウィンが来るまでだぞ」

彼は念を押した。わたしはしっかりと首を縦に振った。それで彼は満足したようだった。

壁をつくようにして手を離す。ナイトの体は一瞬宙に浮いているように見えた。それから自然な落下が始まる。

軽い着地の足音が聞こえてきた。

ナイトは去っていった。そして、わたしは残っていた。

ホールを思わせるチェストの端まで行き、フィリアを見る。彼女の髪がシートに流れているのが見えた。薄闇の中で色濃く輝いているのが。

わたしはそうして、ガーゴイルの銅像のように、しばらく彼女を眺めていた。ナイトの言葉を反芻しながら……。

わたしは今さらのようにフィリアへの思いをかみしめていた。

彼女との関係は、わたしがネズミであって初めて成立することも思い出していた。人間とヴァンパイアがどうして愛し合えるだろう。人間にとってみれば、我々は狩人なのだ。いくら命を奪わなくても、わたしたちは人を傷つけずして生きてはいけないのだ。どんな人間がそれを許せるだろう。

わたしはネズミのままであっても彼女のそばにいたいと思った。たとえ無力であっても、彼女に触れられるならば。束の間でも彼女に笑顔をもたらせるならば……と。

わたしはなるべく彼女との時間を持つと考えた。

彼女と共にいられる時間は夜だけ。それも彼女が仕事から帰ってきてから眠りにつくまでの短い間だ。

どれだけ誘っても彼女は決まった時間に眠りにつくのだ。

「また明日ね、ランディ」……と。

その日はどんどん近づいてくる。だんだん時間が加速していくようだ。ネズミの声では状況を説明できるわけもなく、わたしは一人焦るばかりだった。

ハロウィンまで時がない。それを過ぎてしまえば二度と彼女に会うことはできないのだと……。

そして、それはやって来た。

夕日が建物の陰に隠れ、空に青みがかかると始まりだった。

体が急激に熱くなった。ひどく眩暈がして、心臓が早鐘のように鳴っている。

あまりの苦しさに耐え切れず、床に倒れ伏した。冷たさを感じたのは一瞬だった。周囲の風景がぐるぐる回り始め、吐き気が襲った。

四肢が引つ張られる感覚がする。関節が、骨がきしむ。

続いて強烈な痛み。長い間ネズミの姿でいた後遺症だ。あまりの痛みに意識が遠のいた。

どのくらい気を失ってだろう。

気がつくと変身は終わっていた。頭を動かすとシャラシャラと髪が鳴った。投げ出してある手は見覚えのあるものだった。体の節々が痛み、重かった。硬く冷たい床が気持ちよかった。

わたしはしばらく横になったままだった。

やがて、なにかくぐもった音が聞こえてきた。モーター音だ。それがエレベーターのものだと気づいた時、わたしは飛び起きた。

日はすっかり暮れていた。路には街灯が点り、家々の窓からも光がこぼれていた。

足音が聞こえる。幾度となく聞いた足音だ。

鍵を開ける音がして、彼女が部屋へ入ってくるのと、わたしが窓から外へ出たのは同時だった。

姿が見えぬように壁に身を寄せる。

この位置からではわたし自身にも彼女の姿は見えなかった。けれどもその行動は手にとるように分かった。彼女の気配が部屋を横切ってゆくを感じた。

どう表現すればいいだろう。おそらくはサーモグラフィーを通して見るような感覚だ。

彼女はいつもどおり編みこんだ髪を手でほぐしながら、こちらへ近づいてきた。わたしから壁を隔てて一メートルも離れてはいまい。彼女を今の自分の目で見てみたい。そんな欲求がわたしの中で生まれた。いつも見上げていた彼女を見下ろしてみたい……と。もっともそれが実現されることはなかった。

フィリアは呼んでいた。窓の傍のチェストに置かれた巣箱。その中にいるはずのネズミの名を呼んでいた。

今までこんなことはなかったのだ。“ランディ”が巣箱の中にないなんてことは……。

彼女は動揺し、不安に思っていた。声のトーンが徐々に変わっていくのだ。それは今まで耳にしたことのないものだった。そして、その結末は想像できた。

じつとしてはいらなかった。これ以上彼女の声を耳にし、彼女を感じているなんてことはできなかった。

「ランディ……」

部屋の中を探し回る足音。声が次第に震え始め、力を無くしていた。彼女は泣き出していた。わたしの名を呼び続けていた。

わたしは心を閉じた。耳を見えぬ手でふさいだ。

“今わたしが出て行ったところで何にもならない。これ以上彼女に関わるわけにはいかないんだ”

そう自分に言い聞かせた。

それからわたしは最善の策をとった。その場から去ったのだ。ナイトがしたのと同じように。

わたしはあえて後ろを振り返らずにいた。彼女のことを考えずにいた。それでもわたしの足取りは重かった。それが変身のせいだけではないことは分かっていた。

風がやけに冷たく感じられる。体の内側まで入り込んでくるようだ。周りの風景も人間にもまるで親しみもつながらも感じられなかった。全てがかつてと違って見えた。

それは一過性のものだと分かっていたのだが……。

わたしは先を急ぐ旅人のように、顔を上げずに街を歩き続けた。

これで良かったのだ

これこそ一番の方法だったのだ

わたしは本当にそれを信じているのだろうか

いや、信じられればと思う

そうすれば、どれだけ楽になれるだろう

胸をかきむしらばかりの日々

思い出すのはフィリアと過ごした時間

わたしは間違いを犯したのではないだろうか

彼女を一人置き去りにしたことになるのではないだろうか

彼女とつながりをもつ存在をどうして確かめなかったのだろう

ナイトは諭した

『それは思い出でしかないんだ、ランドル。彼女にとっても全く同じことなんだぞ』

至極当然なことだ。父の言いたいことは良く分かっていた

昔のわたしだって同じことを言うだろう

友人がその悩みを抱えていたなら、わたしだって言うに違いない
だが……

わたしは気がつくと、彼女の姿を思い描いているのだ

“ 忘れる！ ”

それはいいことに思えた。可能ならばの話だが

現実のわたしはフィリアのマンションを意識的に避け続けていた
それは忘れるというには、ほど遠いやり方だった。

フィリア 1 (1)

私の名前はフィリア・ノマ。私立小学校の教師を勤めている。

私はロンドンのダウンタウンにある古いマンションに住んでいた。ほとんど毎日が学校と家との往復。休みの日も図書館へ通うかせいぜいシヨッピング。

私が他の人たちから見て、退屈な人間だと映ることはよく分かっている。平凡だが、穏やかな日々。これが変わるなんてことは考えもしなかった。

当の体験者である私が言うのだ。夢想だと思われても仕方ないことだと。

だが、これからお話することは全て真実なのだ。ひとかけらのフイクシオンも入っていない物語。

信じ、耳を傾けてくれる人だけに語られるべきもの……。

その日、私は、夜のとばりが降りて久しい大通りを歩いていた。

それは予定外のことだった。

仕事を終えた後、図書館で調べ物をしていたのだが、夢中になりすぎて時間が経つのを忘れていたのだ。

いつもはそれほど人通りの多くないこの道も週末を迎えた今日にはぎやかだった。

人々の足音。話し声。車のエンジンに、たまに鳴らされるクラクシヨンの音。

そして光。街灯に車のライト、ショーウィンドーの輝き、看板のネオンサイン。

カップルや親子連れでにぎわっている。皆寒さを知らないかのようだ。人々の森のようなこの街。

私は彼らの間をすり抜け、家へ向かっていた。

噴水のある広場。そこに差しかかったとき、私は引きつけられ

た。子供の声。泣きながら母親を呼ぶ声だ。

噴水の前をうろつろつとしている。赤いフード付きのコートを着た少女。

私はその子のそばへ行き、軽く肩を叩いた。

「ママ……？」

期待に溢れた言葉。

寒さで赤くなった頬を涙で濡らしながら、それでも彼女は微笑みながら振り返った。

しかし、私の顔を見るとその微笑みはすぐさまかき消えた。少女の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

私は彼女の肩を掴んだまま、しゃがんだ。

「パパとママはどうしたの？」

彼女は顔を上げた。金の睫毛に縁取られたアメジストの瞳が再びこちらへ向いた。

「いないの。行っちゃった」

「おうちはどこ？」

「ニューオリンズ……」

「アメリカの？」

少女はうなずいた。

金色の巻き毛が揺れた。

年は五歳ほどであろう。ハーフポニーに大きな赤いリボンをつけていた。大げさすぎるようなそのリボンも人形のようなその子供にはぴったりだった。

「飛行機に乗ってきたの。大きなホテルに泊まって。ご飯を食べにきたの……」

肩を震わせていたものの、彼女は泣きやんでいた。私をすぐるような瞳で見ている。

「ホテルの名前、覚えてる？」

「えっと……ブライトン」

思わず安堵の溜め息をついてしまう。

外国の子供だと知った時には、どうしたものかと考えていたのだが。

少女に聞こえてしまっただろうか。

ブライトンホテルなら知っていた。この辺りでは有名な豪華なホテルだ。位置もだいたい分かっている。

だが、少女の両親は心配しているだろう。先に連絡を入れた方がいい。

そう思った私は、電話ボックスを探した。

あいにく見当たるのは一つだけ。そこには電話中の女性と順番待ちの男性の姿があった。

私は少女を連れてホテルまで行った方が早いと踏んだ。

「ブライトンならこの近くよ。連れて行ってあげるわ」

安心したように少女は頼りきった笑顔を浮かべた。手を私の手のひらに押し付けてくる。子供の大胆さ。彼女はすでに一人泣いていた自分を忘れたかのようだ。

私たちは歩き始めた。人々の流れに逆らうことなく街に溶け込んだ。

ショーウィンドーの中のおもちゃやぬいぐるみ、そしてモニター。周りに溢れる活気ある人々。少女の視線が一つにとどまることはなかった。しきりに話しかけてくる。

家族のこと、ペットのこと、ニューオリンズの家のこと。

まるで私が全てを知っているように彼女は話していくのだ。子供特有の押し迫るような情熱を持って。

それが落ち着くまでどれだけの時間がかかっただろう。正直なところ、分からなかった。

次第に彼女の集中力は薄れ、「まだ？」と繰り返して聞くようになる。足取りが重くなる。

「疲れた」の言葉とあくび。彼女の注意を引きつける物はなくなっていた。

あたりは閑散としていた。人通りもまばらで光といえば街灯と建

物の窓からこぼれるものだけ。

とてもブライトンのようなホテルのある場所ではない。何故こんな所へ来てしまったのだろう。知らない街というわけではないのに迷子を届けようとする私が迷ってしまったのだ。こんな幼い子供と一緒に笑い話にもならない。

どうするべきだろう。私は立ち止まり、辺りを見回してそれから考え込んだ。

少女はそれで全てを察してしまった。

「あの人に聞いてみようよ」

彼女は促した。その視線の先には一人の男性の姿があった。ざっくりとしたセーターを着た黒髪の……。

先ほど見渡した時には、その存在さえ気づかなかったのだが。おそらくそれは光の届かない、薄暗さのせいだったのだろう。

彼は自然にこちらから視線をそらし、歩き出した。私はそれを見送ろうとした。声をかけてとどめようとは思わなかった。

だが、少女は違った。いつの間にか私の傍から離れていた。

彼の前にいて、行く手を阻んでいた。私に向かって手招きする。

黒髪の男性はまったく驚いていた。私と少女を交互に見ている。

私はおずおずと彼に近づいた。

「あの……ブライトンホテルの場所をお聞きしたいのですが……」

彼の濃いブルーの瞳が私をじっと見つめた。

息が止まるかと思う一瞬だった。眩暈さえ覚えた気がした。彼がすぐさま視線をそらしたために、大事にはいたらなかったのだが。

この時初めて、その整った容貌に気づいた。

「ブライトンなら逆方向だ」

深みのある優しいげな声。耳障りだと思っ者など一人としていないだろう。

「向こうに塔が見えるだろう。あの辺りだ」

私と少女は彼の指し示す方向を見た。言葉どおり、そこにはライトアップされた時計台が見えた。

その手前の大きな建物。あれがブライトンなのだろう。さほど遠い距離とは思えなかった。

「ありがとうございます」

私は礼を言いながら少女のほうを見た。

彼女ははまだ彼のそばにいた。何かを話しかけている。困惑したような微笑が彼の顔に浮かんでいた。

少女は彼の手を両手で包み込んだ。それで決まりだった。彼はうなずいて、少女の手を引き、こちらへやって来た。

「ブライトンまで案内しようか？」

「早くママとパパに会いたいの」

……そうして、私たちはまるで親子のように少女をはさんで歩き出した。

少女はひっきりなしに彼に話しかけていた。前に私に話したことも含めて、思いついた先から話していくのだ。

子供特有の順序のなさ、まとまりのなさ。彼はそれを楽しんでいくようだった。時にあいづち、質問をおりまぜて聞いていた。

そのうち、私は奇妙なことに気づいた。彼は少女を“キルティン”と呼び、少女は彼を“あなた”と呼んでいるのだ。

「そういえば、お名前聞いていなかったし、言わなかったわね」

「聞き取れなかった。」

それはそうだろう。二人が同時に名乗ったのだから。

彼らは顔を見合わせて笑い出した。あまりにおかしそうに笑うので、私もつられて嘖き出してしまった。

「ランドル・ウェルボルド」

「キルティン・ウェバーよ」

二人はそろって手を差し出した。

「私はフィリア・ノマ」

次々と握手する。

私たちは本当におかしくなってしまうって、大きく声を上げて笑っ

た。それはどこかの犬が吠え出すのを誘うほどだった。

ランドルは唇の前に人差し指を押し付けて“静かに”とジェスチャーした。

私は笑いをかみ殺したが、キルティンはどうも上手くない様子だった。くすくす笑いがもれている。

このことで、私たちの雰囲気は一気に和やかになった。ホテルへの道は小さな旅にでも感じられたほどだ。

だが、ランドルの的確な指示で、私たちが費やした時間の半分もかからず、すでにホテルが見える距離にたどり着いていた。

疲れに負けて彼の背中におぶわれていたキルティンもそれに気づいた。

彼女は地面に降りると、それまでの自分など忘れて、私たちをどンドン引っ張っていった。とどめていなければ、車の行き交う道を突っ切ろうとする始末だった。

玄関へと続く階段を半ば引きずられるように駆け上がり、ロビーへと入った。

「ママ！」

ロビーのソファに沈み込むようにして座っていた女性が立ち上がった。

キルティンは彼女に駆け寄った。二人は抱き合い、母親は神への感謝の言葉を呟いていた。

「あの人たちが連れてきてくれたの」

少女の小さな指が私たちを指す。それでようやく母親は私たちの存在に気づいた。

娘の手を取り、こちらへやって来る。

彼女は父親がまだ外で娘を探していること、警察に捜索をお願いしたこと、そしてどれだけ心配したかを早口でしゃべった。私たちへの感謝の気持ちは何度も言葉をかえて口にした。

「せめてお名前だけでも……」

彼女は言った。

私は「当たり前前のことをしただけですから」と答えなかった。それはランドルも同じだった。

「でも、楽しかったわ」

キルティンが言った。母親にしがみつくように立ち、金の髪を撫でられながら。

彼女たちは私たちを見送ってくれた。ホテルの玄関から私たちが見えなくなるまで。

ことにキルティンはちぎれるかと心配になるほど、手を振っていた。

フィリア1 (2)

角を三つ曲がっただけで、ホテルは完全に見えなくなった。

私とランドルは肩を並べて歩いていった。

ここは大きな通りだったが、時間が遅いためか車の通りは少なくなっていた。店もほとんどが扉を閉ざしている。目に付くのは、ライティングされた看板とぼんやりとした光を放つショーウィンドーくらいなもの。

ウィンドーの中ではマネキンが無表情に立っていた。一人であれば早になってしまっただろう、夜の静けさに包まれた街。

「無事に見つかってよかった。随分夜もふけているしね」
恐れなど無縁のランドルの声。

彼はちらりと空を見上げた。それは私を落ち着かない気分にした。なぜかは分からないのだが。

「あなたのおかげです。私一人じゃとても……。ありがとうございます」
「礼には及ばない」

彼は私を見た。まったく自然な仕草だった。

今や私は彼を昔から知っているような懐かしささえ感じていた。出会ったときは、近づきがたいとさえ思ったことが信じられなかった。

キルティンのおかげだろうか。いや、それだけではない気がする。私は立ち止まった。ランドルの背中を目にして、彼が去っていくことを知った。そして、おそらくもう二度と会うことはないことも。彼は後ろで立ちすくむ私に気づき、振り返った。

初めて会った人に対して、ばかばかしい思いだと思う。それでも私は彼を引きとどめたかった。

「あの……お茶でも。付きあわせてしまったお詫びにもならないだろうけれど」

言い終わってから、はつとした。夜は本当に更けていた。店など開いている時間ではない。

「私の家が近くなんです。お茶でも飲んでいってください」

私は慌てて言葉を継いだ。

ランドルの浮かべていた微笑が消えた。彼は身じろぎした。私を見つめている。

続く沈黙が私に冷静さを取り戻させた。こんなことは正気の沙汰ではなかった。こんな夜中に初対面の男性を部屋に招くなど。彼はどう受け止めただろう。

それでも彼とこのまま別れたくないという気持ちは強かった。自分でも驚くほど強い思いが……。

「ご馳走になるうか」

しばらくして彼はにこやかに言った。タイミングを計っていったとさえ思えるほどだった。

私はほっと息をついた。彼の言葉から他の意図は感じられなかった。

私たちは共にマンションに向かった。少なくなった車の通り、まばらな人たちを背にして。

客人が私の部屋を訪れるのは随分と久しぶりのことだった。

もともと、その時の私はそんなことなど思いつきもしなかったけれど。

彼をリビングのソファへ案内する。

コートを脱ごうと彼に背を向けた私は視線を感じた。素早く振り返ると、彼はちょうどソファに腰を沈めるところだった。

気のせいだったのか。私の感じすぎだろうか。私はいぶかしみながら、キッチンへ向かった。

両開きのガラス窓の戸棚から、一对のカップとソーサーを取り出す。埃っぽいような気がしたので、布巾で丁寧に拭いた。あまりにも一生懸命磨いたので、一隣隣の部屋にいるランドルの存在を忘れ

るかと思うほどだった。

テーブルにきちんと揃え、下の棚からケトルを取り出す。

紅茶の缶とコーヒーの袋を目の前にして、私は考え込んだ。どちらがいいか聞くのを忘れていた。基本的な過ちに少し慌てながらランドルのいる部屋に戻った。

彼は自然にソファに座っていた。窓のほうを見ている。私はその視線をたどった。

窓枠に揃えて置かれたチェスト。その上の箱。彼はそれを見ている。以前、飼っていたネズミの巣箱だった箱だ。

部屋の前に置き去られていたネズミ。

入れられていたバスケットには、私の母に預かってほしいとの手紙が添えられていた。

黒い毛のかわいらしい“ランディ”という名のネズミ。

私が出かけている時にいなくなってしまった。

それでも、その箱を捨てきれないでいた。ある日、その箱を覗き込んだなら、ランディが戻ってきていそうな気がするから。

あのくりくりとした目。絶えずひくひくと動かしていた鼻。かろうじて指先の分かる小さな手。呼びかけると駆け寄ってきた、あの小さな子。

何故今になって思い出すのだろう。私は思い出さなくなどなかった。部屋の隅々まで探して、ランディがいなくなったことを知る自分。悲しみと戸惑いの中で涙にくれる自分の姿など忘れ去ってしまったかった。

私はランディさえ失ってしまったのだ。ランディさえも。

私ははっとした。ランドルがこちらを見ている。

「……ごめんなさい。何がいいのか分からなくて」
慌ててのつまりながらの言葉。

彼はかすかに首を振りながら立ち上がった。“全く構わないよ”と彼の瞳は言っていた。

「……」

立ち尽くしている私のほうへ歩み寄ってくる。私をじっと見つめたまま。

猫のようにしなやかだが緩慢にさえ見える彼の動き。起きたまま夢でも見ているようだ。まるでオブラートに包まれたような感覚。時はいつもものように流れているのだろうか。

あと一歩で体が触れ合いそうなところで、彼は立ち止まった。ゆっくりとその手が持ち上がり、私の頬を縁取るような仕種をした。しなやかな長い指が私の耳に触れそうになる。

私は身動きさえできなかつた。

「フィリア……」

初めて彼が私の名を呼んだ。味わうようにゆっくりと。細波のような優しい囁き。

「どうして髪をほどこかないんだ」

私は何も考えられなかつた。どうすることもできなかつた。

彼の手がスティックを抜き取り、解きほぐされた髪が肩に落ちてきた時さえも。これが現実に起きていることなのか自信がなかつた。私は彼の瞳を見ていた。青い瞳がますます深さを増してゆく。まるで海のように。海を潜ってゆくかのように。深海の色。夜の海の色。心細さはない。恐怖もない。まるで海に抱かれているような気分だつた。

私を取り巻く海。力を抜いても溺れることはない。熱くもなく冷たくもない優しい水を感じた気がした。

やがて温かさ。背中に回された腕の感触。気がつくとは私は彼に抱き寄せられていた。それが自然なことのように思っていた。彼を本当に身近な存在に感じた。

彼のセーターに私の頬が触れる……。

そう思われた時だつた。変化が起こつたのは。彼の体に緊張が走り、凍りついたようになった。色の濃い瞳は見開かれ、全ての光を飲み込もうとしているようだつた。

「ナイト……」

呷きとも溜め息ともとれるような声。

私はその言葉に覚えがあった。メモ。メモにあった名前だ。ランデイのバスケットに入っていたメモ。珍しい名前だったので記憶に残っていたのだ。その人物と彼がどんな関係にあるのか。考えはそこまで及ばなかった。

ランドルは窓の外を見やり、そして振り返って私を見た。

瞳に穏やかな光が点る。以前の彼に戻っていた。そして、魔法も力を取り戻していた。

ランドルは何か言った。

「もう遅いから」或いは「時間も時間だし」、「もう行かなければ」……。後になつて何度も彼の言葉を思い出そうとしたが、無駄だった。遠い思い出をたぐるようなものだ。

その時の私は、ただうなずいて、彼の背中を見送ったように思う。まったく……それさえも定かではないのだ。

この感覚は、私が眠りにつくまで続いた。そのため、私を取り残されることはなかった。翌朝、目覚めた私には全てが夢に思われたくらいだった。

ランドル2

それは一瞬の感覚だった。

恐ろしいほどの存在感。いや威圧感といったほうがいいだろうか。それが父である、ナイトのものだということはすぐに分かった。

わたしはフィリアの部屋を出て、一番近くの窓に駆け寄った。

格子窓のくすんだガラス越しに外を見る。廊下は薄暗く、その淡い明かりのせいではより暗さを増していた。だが、そんなものはわたしの目にとって大した障害にはならない。

にもかかわらず、ナイトは街灯が照らし出す光の中に立っていた。コートポケットに両手を突っ込んだまま、道を挟んだ歩道にたずんでいる。

その顔は険しいというよりは、むしろ無表情で能面のようだった。その異様さ。いつもの父とはまるで別人のようだ。

わたしの視線に気づいたかのように、彼は顔を上げ、まっすぐにこちらを見た。

離れた場所であるというのに、まるで傍で向かい合っているかのようだ。圧倒的な力が流れてくるのを感じた。

自分を奮い立たせながら、わたしはすぐにその場に向かった。エレベーターより近くにあった非常階段を駆け下りる。

下に降りつき、先ほどまで姿を認めた場所を見やった。だが、そこに彼の姿はなかった。ただ、光だけが静かに降り注いでいる。

車が一台通り過ぎていく。それを待つてから、わたしは道を渡った。

ほんの何メートルかの距離だというのに、なんと遠く感じられることだろう。足の運びはもどかしく、まるで何かに絡めとられているかのようだ。

これもナイトの影響だというのだろうか。

思うようにまかせない身体に反し、神経は研ぎ澄まされていた。

動くものであれば、すべてを捉えることができるほどだった。

だが、彼を感じることはできなかった。先ほど見たものが幻のように思われた。

それでも、間違えようはなかった。いったい誰にその真似ができるというのだろうか。彼はわたしに気づかせるために、あれだけの気配を示し、姿を現したのだ。

ようやくナイトが立っていたであろう場所に着いた。彼を照らし出していた街灯にくくりつけられたものを見つけて愕然とする。微かな風に吹かれてそよぐそれは、夜に咲く不吉な花のようだった。

見覚えのある赤いベルベットのリボン。

端を引っ張るとやすやすと解け、わたしの手に収まった。その柔らかな表面に指を滑らせる。見直す必要などなかった。

それはあの子供の……わたしとフィリアをつなぎ合わせた、キルティンの髪に付けられていた物だった。

唇をかみしめる。

まさか、ナイトはあの子を傷つけたというのだろうか。

いや、そんなことはありえない話だ。彼が幼子を襲うことなど考えられなかった。大体彼が好むのは若い女性の血だった。

ならば、どうしてこんなものを残していったのか。

リボンを握る手に思いのほか力が入る。それは、わたしの手を汚す血のように見えた。悪い予感呼び覚ますもの。

ナイトの仕業だ。導き出した答えに総毛立つ。

リボンを結びつけたのはもちろんのこと、彼があの子供を差し向けたのだ。わたしが約束を守るかどうか試してみたということなのだろう。

つまり、彼は全てを見ていて、全てを知っているということだ。

そして、それを知らせるためにわざわざ姿を現した……。

わたしは瞬時にさらに神経を尖らせ、辺りを探った。ナイトがまだ近くにいる可能性は十分にあった。何か痕跡がないか周りを見渡

す。

石畳の道路を進む車の音が遠くに聞こえて、消えていった。テールランプの明かりももう見えない。

辺りは夜の静けさを取り戻していた。ちらちらと瞬きを繰り返す街灯の音が耳障りに聞こえるほどに。

路にはわたししかいなかった。少なくともナイトはこの周囲からは姿を消していた。

それを確信して、一気に力が抜けるのを感じていた。

彼は会うまでもないと判断したのだろう。事実、それだけでその意図は通じていた。

『自分のしていることを落ち着いて考える』

彼の声が聞こえるようだ。

だが、わたしはフィリアに会い、彼女と話し、この手で彼女に触れたのだ。それは事実であり、それこそ、わたしの望んだことだった。それを否定するつもりはない。

ナイトの言いたいことも分かっていて。

そもそも、彼は他の者の恋愛に口をはさむようなタイプではない。少なくとも今まではそうだった。

今回が特別なのだ。相手が人間。それが問題なのだろう。

わたしは歴史としてしか知らないが、昔のわたしたちは人間に対して、ことにヴァンパイアと通じた人間に対して残虐の限りを尽くしたという。

多くの人間、そして間に生まれた混血児ダンピールの死が見世物でしかなかった時代。

ナイトはその頃のことを多くは語らない。他の年配者も同じだった。

現在も人間とそういつたかわりを持つことはタブーとされた。

特に口に出すことではない、暗黙の了解……。

破天荒な行いを好むナイトでさえ、それには一応の従順さを示していた。それは過去いかに恐ろしいことが起きていたかを如実に物

語っている。

だが、現在において、それがどれだけの意味を持つのだろうか。人間を擁護する立場をとる強力なヴァンパイア、トレヴィイスの影響力が大きいこのイギリスで。過去の惨劇が公然と繰り返されることなど想像もできなかった。

父の思いが理解できないわけではない。それでも、その掟に必ずしも従わなければならないとは、思えなかった。

わたしは正面にあるフィリアのマンションを見上げた。窓のいくつかにはまだ明かりが点っていた。そして、彼女の部屋の窓にも、また……。

彼女は今どうしているのだろうか。

その姿を思い描き、名をそつと呟く。まだ耳にも口にもそう馴染んではない名前。だが、心の中では何度も繰り返していた……。

一度は忘れようとしたが、どうしても忘れられなかった。その笑顔やわたしを呼ぶ声を。

再びそれを目にしたい、耳で味わいたいと思っていた。会うことができれば、叶うことだと信じていた。

だが、わたしの前に現れたフィリアは……。

美しい髪は下ろされることなく、笑顔も浮かぶことはなかった。

まるでそれがわたしの夢であったかのように。

かつてのナイトの言葉は本当だった。

「それは思い出でしかない。彼女にとっても同じだ」と。

頭では分かっていた。ネズミの姿のときと今とでは違って当然だとは。

それでも、そのよそよそしさは耐え難いものだった。

遠い彼女へのもどかしさと、そばに感じたいとの思いで半ば強引になっていたのは否めない。

あの時、ナイトの介入がなければ、どうなっていたのだろう。

手の内のリボンを再び見て、わたしは自嘲気味に息をついた。

これで冷静だと言えるのだろうか。今でさえ、彼女の元に戻りた

いと願っているというのに。

リボンをそつとポケットにしまう。

それから、街灯の光の下から抜けて歩き出した。今はそうするべきだと分かっていた。

夜の冷え冷えとする空気を胸いっぱい吸い込む。

体に染み入る冷たさが、このうかれた熱を取り去ってくれ、ことを願って。

静まり返った道を歩きながら、わたしは夜明けまでには遠い、まだ暗い空を見上げた。

フィリア2 (1)

昨晚の出来事は現実なのか。ランドルは何者だったのか。

昼間の私には、それを考える余裕などなかった。

私は仕事に専念した。いや専念せざるを得なかった。子供を相手にする教師という仕事は、とても忙しい。ほかの事を考えている時間などないほどに。

子供達の行動は、いつも私の想像を越えていた。伸びやかな感性に大胆な行動力。

そして、私はこの仕事を愛していた。かつて教職についていた母の影響だろうか。

とにかく仕事の間中、私は昨日のことを忘れていた。幾日か経つ頃には思い出そうとすることもなくなつた。

私はいつもの通り生徒達の間を歩いた。いつものように彼らに語りかけた。以前の私と全く変わりなく。そうだ、夢は現実を揺るがしはしないものなのだ。

終業のベルが鳴った。生徒達がざわめきだす。

ホワイトボードの前でテキストを閉じた。子供達はすでに帰る準備を始めている。

放課後、誰の家に遊びに行くのか。今日のおやつは何だとか。今日は見るテレビはどれで、何のほうが面白いだとか。色々な話題が飛び交う。

私は大きな声を出して宿題を告げた。教室が一瞬だけ静かになる。そして、終わりの挨拶をしてテキストをバッグに入れると、子供達は勢いを取り戻し、ざわめきながら私の傍までやってくるのだ。

子供達を導き、校舎の入り口まで向かう。そこには彼らの親達が待っているのだ。

この人はチャールズのお母さんで、この人はアマンダのお父さん……。確かめながら子供を引き渡していく。

私の仕事の中で最も気を遣う、そして最も好きな時間だ。家庭の中が垣間見える一瞬。

親がどれだけ我が子を愛し、子供がどれだけ親を信頼しているのかが見えてくるようだ。

「さよなら、ノマ先生」

「先生、さようなら」

子供達は口々に声をかける。ほっとしながら彼らを見送る。教師になって二年になるが、この気持ちは毎日のものだった。

私は外まで出て、子供達の後ろ姿を見送った。

その時、何かが後ろから私の上着を引っ張った。振り返ると、そこにいたのは赤毛の髪を三つ編みにした少女ジャネットだった。

マンシヨンの一階下に住むオースティン夫妻の子供だ。彼女は隣のクラスの生徒だった。

「また後でね、先生」

背伸びをして、唇の傍に手をかざすと彼女はそつと言った。そばかすの顔が屈託なく笑っている。

「ええ、今晚ね」

私も彼女に笑い返ししながら、声を細めて言う。ジャネットは二人の秘密に満足していた。

上着からぱつと手を離すと、先で待つ母親らしい姿の元へ駆けていった。私は彼女が視界から消えるまで見送った。

先ほどとはうって変わって、校舎は静まり返っている。扉を閉めてスタッフルームへ向かった。

灰色の雲の隙間から、オレンジ色の光がベールのように広がっている。窓越しに見えるそれは、暖房のきいた、乾いた空気の中にあるというのに温かそうに見えた。

その風景を最後に一瞥してから部屋に入った。

たくさんのソファが並べられた部屋。その中央に若い教師が三人群がっていた。その中心に、背の高い女性、ルース・ピケットの姿があった。

ルースが何か言っている。教師達はすでにコートを着、鞆を手にしていた。

私は、ぼんやりと彼らの目的を知った。構わず、部屋を横切り、隅にあるコーヒーマーカーの前に立つ。

ルースが気づき、近づいてきた。私は彼女を見守る教師達に驚きの表情が浮かぶのを知っていた。

「フィリア」

ルースのはつらつとした声。

私は彼女を見た。明るい赤のワンピースを身につけ、パーマで波打った黒髪を束ねている。大きな金の輪のピアスがきらきら光っていた。

「今から飲みに行くの。一緒に行かない？」

強引さは全くなかった。彼女が好意で声をかけてくれたことは分かっていた。

いつも必ずと喋っていたいいほど誘ってくれるのだ。私が断ることを知っていないから。

「用事があるから……」

たとえ今晚用事がなかったとしても、行くつもりはなかった。仲間内での飲み事ほど、私が苦手なものはなかった。

アルコールは人と人の関係を円滑にするというが、私にはそうは思えなかった。

関係は密になるどころか、一人はじき出された自分を実感するのだ。やけに後味の悪い印象を残して、酔いは去っていくだけだった。私は口をつぐみがちになり、周りの者達は気まずい思いをするようになる。

だから、無理やり理由を引っ張り出し、途中で退散……最近では辞退するようになっていた。

「そう、残念ね」

ルースは本当に気落ちしたように言った。

「また、今度一緒に行きましょう」

彼女の背後の教師達は興味深そうに私達を見ていた。

ルースは彼らを振り返った。彼女は何か言いたそうだった。

それを知りながら、私は目の前のポットに視線を戻した。プラスチックの取っ手がついた紙コップを取り出して、その中に熱いコーヒーを注ぐ。

それで、ルースは言葉を見つけることもできないままに離れていた。

申し訳ないという気持ちがないわけではない。

何かと気遣ってくれる彼女。それが母への恩義ゆえのことだったとしても。

彼女は母の教え子だった。尊敬する教師として母の名を上げていた。

私はそれをいつも複雑な思いで見つめていた。娘である私よりも、ルースの方が母に似ているような気がしていた。私は母にはなれない。何もかも似つかわしくないように思っていた……。

考えを打ち切ったのは、思い出に浸ろうとする自分に気づいたからだけではない。

皆が部屋を出て行く気配がしたのだ。顔を上げてまで、それを確かめようとはしなかったけれど。

カップを持ち、その温かさに触れようと片手を添える。

スタツフルームは静かになった。そして私は一人だった。

フィリア2 (2)

暮れなずむ街の中を私は歩いていった。

瞬きをして点り始める街灯。人々の影は周囲の風景に溶け込んでいた。

黄昏時。まるで異世界に踏み込んでしまったようだ。人も物も平面に閉じ込められたような感覚。ひどく奥行きのある絵画。そのように見えた。

……手がやけに痛む。

重い買い物袋が指に食い込み、指先の感覚を奪っていた。いつもの倍は量があるのだ。

もう片方の手に持ち替えてみる。袋を持っていた手のひらが熱かった。うずくように熱を発している。

車が目の前に迫るぎりぎりのところで、何とか大通りを渡りきっていた。

二台の車がすれすれに通るほどの道にさしかかる。

もう一度袋を持ち替えようかと考えた時だった。乱れた足音が背後に聞こえた。

「フィリアさん！」

名を呼ばれたことに驚きながら、振り返る。そこにいたのは顔なじみの本屋の店員だった。

彼は相当慌てて飛び出してきたようだった。細くふさふさしたブラウンの髪が乱れている。手にした厚い本を差し出して、走り寄ってきた。

「この前、注文した『児童教育』の本が今日入って」

彼は息を切らせて言った。

「ああ、ストロークさん。でも……」

私は買い物袋に目を落とす。

ようやく状況に気づいたクレバー・ストロークは、きまり悪そう

に本を引つ込めた。改めて私の荷物を見る。

「重そうだ。ちょっと待ってて」

彼は本屋の方へ走り戻った。

入り口に店主が立っていて、こちらを見ていた。恰幅のいい白髭の老人だ。

ストロークは主人の傍をすり抜けて、店の奥に入った。そちらへ向かって老人は何か言っていた。

持ち出したコートに腕を通しながら出てきたストロークが彼と二、三言言葉を交わしている。すると老人は微笑んで、彼の背中を見送った。

ストロークは、私の手から重い買い物袋を取り去った。その片手にはあの『児童教育書』を持ったまま。

「一石二鳥だろう？ 家まで運ぼう」

彼の顔にいつもの気さくな笑顔が浮かんだ。人をほっとさせるような表情だ。

「でも……」

私は本屋のほうを見やった。老人がこちらを見ていた。

「母親の代からのお客さんだからって。大事にしなきゃと言っていたよ」

彼は歩き始めるように促した。

私達は肩を並べて歩き出した。私はしびれてしまった手を揉みほぐしながら。

ストロークは人を安心させるような雰囲気を持っていた。それは少年の頃から変わりはなかった。まだアルバイトの店員だった頃から。

笑うと目の端に浮かぶ笑い皺のせいだろうか。それともいかにも優しそうな大きな鳶色の瞳のせいだろうか。

母は彼がお気に入りだった。彼女がクッキーやキャンディを渡すのを何度か見たことがあった。ストロークが遠慮しなければ、部屋にだって上げていただろう。

……とにかく、彼とは気を遣わずに話せた。

昔から知っているとただけではない。好きな本、音楽、映画などの話。たとえ好みが違って、彼はあの魅力的な微笑を浮かべながら、いつまでも話を聞いてくれるのだ。

私の夢。一生教師を続けたいという希望にも彼は耳を傾けてくれた。

『一生をかけた仕事をもてるなんて、素晴らしいことだよ』

彼はそう言った。

つまらない世間話さえ、彼が口にするに興味深く感じられたものだ。

彼と私は最近アメリカで起こった銃の乱射事件について、意見を交わし合った。二人が意見を出し終わる前にマンションへとたどり着いた。

私がエレベーターに乗ると、彼は手を伸ばして私の部屋のある三階のボタンを押してくれた。

私は彼から本を受け取った。買い物袋はエレベーターの床に置かれていた。

「ありがとう」

「どういたしまして。また店の方に寄ってくれたらいい」

彼の言葉がようやく最後まで聞き取れた。手を振る彼を残して、エレベーターの扉が閉まり、上へ上がり始める。

やがて三階へ着いた。扉が開いたとたん、子供達の声が聞こえてきた。

私はオースティン夫妻との約束を改めて思い出していた。ジャンネツトがエレベーターの中に飛び込んでくる。

「ノマ先生！」

彼女は私の手を引いて、エレベーターから出ようとした。

私は慌てて買い物袋を持ち上げた。重さで指が反りそうになるのを押さえて、よたつきながらエレベーターから出た。

廊下にはオースティン夫妻が待っていた。二人はパーティ用の衣

服に身を包んでいる。

末っ子のクリステイーナが夫人のコートを握って立っていた。その後ろには長男のウィリアムがいる。

“預かっていただくなんて申し訳ない”

夫妻は口々に言った。それでも気難しいクリステイーナがそつと私に寄り添った時、二人は安心したようだった。

ウィリアムは兄らしく冷静に。ジャネットは子供らしくはしゃぎつつ、両親を見送った。

二人が去つて、素早く動いたのはウィリアムだった。買い物袋を持つてくれる。

ジャネットが不服の声を上げた。彼は仕方なく、袋の片端を持たせた。妹のほうが軽くなるように袋を傾けて。

私はクリステイーナの肩を抱くようにして、ドアの鍵を開けて子供達の中に入れた。

フィリア2 (3)

子供達の食欲は驚くべきもので、私の三日分にも相当する食料を一回で食べ上げてしまった。

ウィリアムは黙々と食べながらもお代わりを要求したし、ジャネットも明るく皿にスープをつぎに往復した。クリスティーナでさえ、口の周りを汚しながらも一生懸命、口に食べ物を運んでいた。

台所で何個もの鍋や皿を洗っている間、自然と心が和んできた。そういえば、料理を人に作ってあげたのは何年ぶりのことだろう。

唯一得意といえる料理。私とは母は共に台所に立ち、腕をふるった。『いい奥さんになれるわ』

彼女はよくこう言ったものだ。

父も手を叩いて絶賛してくれた。大げさに手を広げて『こんな美味い料理は生まれて初めてだ』などと大きな声で言ったものだった。今となっては、セピア色に赤茶けた写真のような印象だ。懐かしくてほろ苦さを持った、現在に一切影響することのない……。

水の流れが耳に戻り、私は自分がぼんやりしていたことに気づいた。慌てて水を止め、再び鍋を擦り始める。

その時、玄関でノックが聞こえた。誰だろう。私はタオルで手を拭き、玄関へ向かった。

ソファに座った子供達が興味深げに私のほうを見ている。

クリスティーナは小鹿のような大きな瞳を向けていた。ウィリアムは宿題の載ったテーブルから顔を上げて。ジャネットはテレビから目をそらしてまで。

私はゆっくりと扉を開けた。

そこにいたのは、ランドルだった。シャツにジャケットにコートという出で立ちで。手に赤い薔薇の花束を持っている。

ジャネットが歓声を上げた。彼は私の肩越しに子供達を見つけた。

「こんばんは。小さなお客様だね。お邪魔かい？」

私は子供達を振り返った。

ジャネットがソファから飛び降り、こちらへ駆けてくる。彼女は私の傍で立ち止まり、ランドルの顔をじっと見た。嫌な予感がしたが、遅かった。ジャネットは止める間もなく、聞いていた。

「ノマ先生の恋人なの？」

彼は一瞬、ジャネットの方を凝らすように見ると……、

「そうだね」

微笑んで、悪戯っぽく言った。

再び彼女の口から歓声もれる。私は混乱していて、否定する言葉さえ思いつかなかったのだが。

彼は私に花束を持たせて部屋の中へ入ってきた。

「やあ、こんばんは」

奥のウィリアムの方へ挨拶する。ウィリアムは軽く会釈した。

そして、ランドルはクリステイナへと近づいていった。

クリステイナの緑の瞳は、彼に釘付けになっていた。彼が歩み寄るにつれ、瞳が見開かれていった。その場で後退りするようにソファの背もたれに体を押し付ける。彼女の瞳が、それから体が震え出した。突然凄まじい泣き声が彼女の唇から漏れた。何とかして逃れようとするように爪でソファを引っかいている。

「クリステイナ！」

ウィリアムが覆い被さるようにして、彼女の名を呼んだ。しかし、彼女は半狂乱になって泣き叫んでいた。

ランドルは愕然と彼女を見つめていた。どうすることもできないまま。

クリステイナは言葉にならない声を上げていた。兄にしっかりとしがみついた状態で。ウィリアムは彼女の背を軽く叩きながら、あやしていた。それでも彼女は落ち着く様子を見せなかった。

「あの……あの……」

ウィリアムの腕の下から手を伸ばしている。その指の示す先には、ランドルがいた。

彼女の顔を胸にうずめさせたまま、ウィリアムは振り返ってランドルを見た。

ランドルは、はっとしたようだった。彼はクリスティーナに背を向けて、こちらへ戻ってきた。

啞然としているジャネットが彼を目で追う。

彼はドアの横にいた私の腕を掴んだ。花束が音を立てて床に落ちる。

半ば引きずられるようにして、外の廊下へと出た。クリスティーナの泣き声が開いた扉からもれる。彼はそれを後ろ手に閉めた。

私と彼は向かい合っていた。彼は目を伏せている。声をかけようとしたとき、彼は顔を上げて私を見た。夕闇を思わせる瞳が私をしつかりと捕らえる。

「子供達を驚かせてしまったようだ。今日は去るべきなんだろうね」
彼は細く息をつき、ドアをちらりと振り返った。

「君とゆっくり話がしたかった。あのまま別れるのは嫌だったんだ。あんな印象のまま君の記憶に残るなんてね」

私に視線を戻して、彼は言った。

彼の瞳に力があるのは明らかだった。人を幻惑させる力。彼はそれを意識しているのだろうか。私には確信がなかった。

彼が近寄ってくる。私は思わず後退り、壁にぶつかった。

彼は壁に手をつき、私から視線をそらさずに言った。

「また来てもいいかい？ 話をしたいんだ、本当に」

私は彼の顔を見続けることができなかった。

彼の瞳を見たなら、以前のようになってしまうそうだった。彼に抱きしめられても自然と思えるような。胸が苦しかった。彼ともう二度と会いたくないように感じた。これ以上彼と会ったなら……。

だが、私は拒否することができなかった。襟元に折り込まれたスカーフを見ながら瞬きもできずにいた。

彼は私に触れないまま、離れた。

私は壁に張り付いたように動けなかった。足音が離れていくこと

を知りながら。

彼の乗ったエレベーターが下り始めたとき、私の呪縛は解けた。私はエレベーターを振り返ることもしないで、ドアを開き、部屋に入っていた。

部屋の中は静かだった。クリステイナはすでに泣き止んでいた。それどころか、疲れ果て、ソファの上で眠り込んでいた。彼女に手をしっかりと握られたウィリアムが、苦笑を浮かべて私を見た。

ジャンネットが寄ってきて、そつと言った。

「先生の恋人のこと、秘密だよね」

彼らにとつても私にとつてもクリステイナが泣いた理由はどうでもいいことだった。彼女はもともと勘の激しい子供だったのだから。

彼女が何を感じたのか、あるいは何を知っていたのか。私達には永遠に分からないことなのだ。

私は彼女の天使のような寝顔を見ながら思った。先ほどのような不機嫌さが、彼女に再び訪れることがないようにと。

私のためにも。そして、彼女自身のためにも。

フィリア2 (4)

思い返してみると、あの時の私はいつもと違っていた。ランドルの存在が影響を与えていたのだと思う。本当に冷静さを欠いていた。だから注意がおろそかになり、あんなことが起こったのだ。まったくの無用心さが招いた事件。

ランドルの薔薇が花瓶の中で花びらを広げていた。「また来るから……彼の言葉を忘れさせまいとするかのように。」

彼が訪れた日から一週間ほど経っていただろうか。私は仕事を終えて、部屋へ戻ってきていた。すでに日が落ちてから随分経ち、暗闇が辺りを包んでいた。

夕食はもう済ましていて、キッチンで明日のご飯の仕込みをしていた時だった。玄関のドアをノックする音を聞いたのは。

危うくジャガイモとももナイフを落としそうになる。一瞬、聞き間違いではないかと疑いもした。事実、この一週間、玄関先に誰かいるような気がしたことが何度かあったのだ。もちろん感じすぎに違いない。だが、今は……。

待つまでもなかった。再びノックが聞こえてきた。私はナイフを置き、ジャガイモをボールに戻し、玄関へと向かった。

ノックは続いている。

「今開けます」

鍵を外し、ドアを開いた。

だが、そこにいたのはランドルではなかった。

険しい顔つきをした大柄な男。鋭い目で私を見下ろしている。

「フィリア・ノマだな？」

その息は煙草の匂いがした。ドアにかけられた浅黒い手の甲には、二匹の蛇が絡み合う刺青が施されていた。牙をむくその蛇達は、私を脅かした。私の心はひるみ、力がどこかへ流れ出ていくような気

がした。

そしてなによりも、聞き覚えのあるこの声。前に電話口で聞いた声だ。太く恐れを抱かせるような声。男はその力を知っているに違いない。

考えるまでもなかった。私は反射的にドアを閉めようとした。

だが男は足を差し入れ、ドアを押し開こうとしている。なんとか踏ん張ろうとしたものの、力の差は大きすぎた。

私は跳ね飛ばされるようにして、後ろに倒れた。手について体を起こしたとき、男はもう部屋の中にいた。

「手間をかけさせやがって」

吐き捨てるような言葉。ポケットから取り出した煙草に火をつけ、くわえる。むせるような濃い香りが部屋に広がっていった。

私は茫然と男を見ていた。何が起こっているのか、まだよく理解できなかった。彼が何の目的でやって来て、何をしようとしているのか。

「ああ、かわいそうにな」

その言葉には何の感情もこもっていなかった。男は深く煙草の煙を吸い込んだ。

「おまえの親父は借金を残して消えたんだ。五千ポンドだ。まったく大した奴だよ。娘のあんたに迷惑かけるなんて。ま、俺としては誰からだろうと返してもらえれば文句はないんだがな」

煙草の灰を揺らして落とす。散った灰がふわふわと床に落ちてくるのを私はぼんやりと見ていた。混乱した頭でも、これだけは分かった。これは父が引き起こしたことだと。

「金は何処だ？」

男が近づいてくる。私は立ち上がる力も失い、首を振ることしかできなかった。

大げさに手を広げ、男はあざけるように息をついた。玄関のドアの前を通り過ぎようとした時だった。男はポールに掛けられたバッグに気づいた。

派手な音がしてバツクの中身が床に散らばった。財布を拾い上げ、中を確認する。

「ああ、足りねえなあ、こんなんじゃ」

男は数枚の紙幣をポケットにねじ込み、財布を投げ捨てた。煙草をくわえなおし、煙を一息吸いこむと、床に落として踏みにじった。木の床に黒い灰の線がついた。

彼はまるで私が存在しないかのように振舞った。クローゼットを開け、引き出しや箱の中身をぶちまけていった。だが、目当てのものが見つけれなかった。男は毒づき、窓際のチェストの方へ歩いていった。

「なんだこりゃ」

ランディの巣箱を手取る。

私は思わず立ち上がった。男はその箱を床に落とした。私はその意図を知った。

「……やめて」

やっと声が出た。私は箱に向かって駆け寄ろうとした。だが、そこへたどり着く前に、箱は踏み潰されていた。切り刻んだ細かい新聞紙がつぶれた箱から飛び出した。まるで何か生き物の死骸のようだ。私はその前でしゃがみ込み、それを胸にかき寄せた。

「へッ……」

男はそれを見下ろし、馬鹿にしたように息をついた。

体がかくかくと震えていた。何故かは分からない。腕の中の箱を見る。形を変えたその箱からは新聞紙のインクの匂いがする。

そう、私はランディが消えてからも新しい新聞をちぎり敷き詰めていた。だが、ランディが戻ってくるなど本当に信じていたのだろうか。あの子はもういない。帰ってくるわけがないのだ。本来なら私自身の手で捨て去らなければならぬものだったのだ。

過去とは決別すべきなのだ。ランディがいたとき感じた幸せ。そんなものは今とは関係のないものなのだから。

そうだ。全く関係はない。父のことにしてよ。

男はチェストの引き出しを探っていた。しまわれていたノートやはさみやペンが音を立てて落ちてきた。

「ああ、これか……！」

男は歓声を上げた。奥に、大事そうに布に包まれて納まっていたものを見つけたのだ。その金目のものと思われる小さな包みを手とり、布をほどいて中身を目にした時、男は慥然とした。

「こんなもの！」

床に叩きつける。それは高い音を立てた。ガラスが飛び散り、小さな欠片はライトの光を受けて銀色に輝いた。

私は微動だにせず、それを見ていた。木製の写真立て。ガラスの破片が写真の上を覆っている。

「金は何処だ？」

男は語気荒く、私をにらみつけた。

「何処だと聞いているんだ！」

彼は膝をつき床を見つめるだけの私に苛立った。肩を掴み、体を起こそうとする。もう片方の手が、私の頬を指して振り下ろされた。

ぶたれると思った私は、反射的に顔をそらし、目をつぶった。

その時だった。

「……グッ」

奇妙な押しつぶれた声が聞こえた。続いて、男の手が私の肩から離れた。

目を開けると、男は後ろに弾き飛ばされ、チェストに背中を打ち付けていた。

「畜生……」

男の唸る様な声。それは私の背後に向かっている。その視線をたどって振り返った私は、男を突き飛ばした存在にようやく気づいた。それはランドルだった。いつ部屋に入ってきたのだろう。全く気づかなかった。息の乱れもない。その落ち着いた立ち方は、まるで前からそこにいたかのようだ。

男はよろよると立ち上がった。体格の差は歴然としていた。喧嘩慣れしているような太い腕の男。比べると彼がなんと華奢に見えることか。

それに気づいたのだろうか、男は、にやついた。先ほどは不意打ちを食らっただけなのだ。だが、今は違う。男は素早く身構えた。ランドルはただ立っているだけだ。

男が殴りかかる。ランドルはその腕を捕らえた。信じられないという表情の男は、彼に押されて後退りした。

チェストが男の腿に当たった。ランドルは彼の首に手をかけ、押しやっけていく。振りほどこうとする男だったが、どうもうまくいかないようだった。足をばたつかせてもその手から逃れることはできなかった。

男の背が弓なりに反り、チェストの上に乗った。開いた窓から突き落とすつもりなのだろうか。苦しそうなぜいぜいという息だけが聞こえてくる。ランドルはさらに寄りかかっていった。

座り込む私の目には男の顔も彼の顔も見えなかった。二人の肩は窓の外の闇にさらされていた。

くぐもった悲鳴が聞こえた。瞬間、ばたついていた足が止まった。そして、数秒の沈黙。ランドルは体を起こした。男は遅れて起き上がった。

首筋を押さえ、おびえたように彼を見た。鋭かったその目は今やどんよりと曇り、苦しさからか涙さえ浮かんでいる。

「化け物……」

男は呻いた。その首筋は痛々しかった。私から見ても首を絞めた跡が分かった。男の手のひらで隠れてよくは見えないが、赤く色が残っていた。

「行け！ 今度来たら容赦はしないぞ」

ランドルは柔らかく、だが怒りを込めて言った。

呪縛は解けた。男は弾かれたように駆け出した。首を押さえたままで。一度もこちらを振り返らずに扉から消えた。

フィリア2 (5)

男がいなくなった後も、私は未だ立ち上がることさえできずいた。

腕の中には、ランディの箱。そして、床には手を伸ばせば届くほどに近い、あの写真立て。

だが、それを手にしたくはなかった。それは過去の遺物なのだ。私は唐突に気づいた。ランディの巣箱と同じだ。いや、それ以上にたちが悪いものかもしれない。

力の抜けた手から箱がこぼれていく。つぶれた箱は、ほとんど音を立てずに床に落ちた。

「大丈夫か？」

ランドルが気遣い、声をかけてくる。彼は、視線を追いつて、かつての私が封じたものに気づいた。

ガラスを払い、壊れてしまった木枠から丁寧にそれを取り出す。こちらを振り返った彼は驚きを隠さなかった。

「フィリア、これは……」

もう我慢ができなかった。彼の手からその写真を奪い取った。そして、破りちぎる。細かく復元できないくらいに。

ランドルはただ言葉を失って、それを見ていた。

「こんなの意味がないのよ！」

赤茶けた写真。幼い頃の私と両親の写真。かつての家族、かつての幸福。戻ることはできない過去。

もっと早くこうするべきだったのだ。そうだ。私に借金を肩代りさせようとした父、死んだ母。それこそ現実なのだから。過去にしがみついて私は何をするつもりだったのだろうか。

「過去なんて昔のことなんて、何の役にも立たないのよ」

私は茫然とするランドルに言葉を投げつけた。

「父も母も恋人も友達も。過去だわ。ランディの事だって！」

「フィリア……」

ランドルは私の肩に触れようとした。私はその手を払いのけた。「未練があったのよ。ランディの箱を取っていたのも、写真を取っていたのも。もしかしたら……。そんなこと、叶うはずもないのに。分かっていたのに」

私はガラスと写真の破片をかき混ぜようとした。だが、ランドルがそうはさせてくれなかった。彼は素早く私の両手を取った。

「フィリア、落ち着くんた」

「離して！」

再び私は彼の手を払った。

「あの人、借金取りだったのよ。父に貸したお金を返せって。蒸発するだけならまだしも、私まで巻き込むなんて。最低の父親だわ！」

私は小さな破片となり果てた、写真だったものを見た。写された笑顔の家族写真。幼かった私は今のことなど想像できなかったろうか。

「父が、あの男がいなければ、こんなことにはならなかったのに。もう父親でも何でもないわ。いつそのこと死んでくれたら……」

父が姿を消してから、すぐに布にくるんで引き出しにしまった写真立て。その時の私は、再びそれを飾る日が来ることを望んでいたに違いない。

だが、今は違う。垂れ込めた重い雲のような私の思いは雷に裂かれていく。

「そんなこと、口にするべきじゃない……」

ランドルは床を見つめながら呟くように言った。私は逆上した。

「あなたには関係のないことでしょ！」

ランドルの表情が曇った。その言葉が決定打となったのか、彼は立ち上がり、私に背を向けた。私は彼の姿を追って顔を上げた。

「そうよ、行って！」

私には分かっていた。ランドルさえ、過去の人物になるのだ。そうなるべきなのだ。

だが、彼は玄関へとは向かわなかった。キッチンへと消え、いく

らかもせず、グラスを手に戻ってきた。

どうしてそんなことをするのか。その行動は私をさらに苛立たせた。これ以上彼と関わりたくなくなかった。いっそ、去っていった。くれたほうが、どれだけ気が楽だろうかと思った。

「さあ、これを少しずつ飲むんだ。気分が収まる」

彼は琥珀色の液体が入ったグラスを差し出した。その中身が何か、私は考えもしなかった。グラスを奪うように取り、感情のまま一気に飲み干す。

次の瞬間、失敗を犯したことに気づいた。グラスの中身は何か強いお酒だったのだ。喉が、頭が、体が一気に熱くなった。

ランドルが何かを言っていたがよく分からなかった。私はその場に崩れるように倒れ、彼が支えてくれるのを感じた。

「ソファに……」

彼の言葉の一部分だけが聞き取れた。

私はよろよろと立ち上がった。再び倒れそうになったところを助けられる。その手さえ振り解き、記憶だけを頼りによるめきながら歩いた。

天国か地獄かも分からない感覚の中で、私はただ、ソファにたどり着けることを祈った。

ランドル3 (1)

砕け散ったガラスの下から手にした写真。それはわたしに衝撃を与えた。

写っていたのは三人。変わらない栗色の髪と大きな目の幼いフィリアと、彼女とそっくりな髪色の細身で背の高い男。そして、わたしも見覚えのある金髪の女、エリーゼ。

見間違えるはずがなかった。彼女は、かつて少年だったわたしに向けた微笑みのまま、写真に残っていた。

ということは、フィリアは彼女の娘ということになる。

わたしはフィリアの中に面影を探し出そうとした。だが、フィリアは今までない苛立ちを見せ、写真を破り千切ったのだ。

苛立ちは父親への怒りに変わっていった。

わたしは彼女を落ち着かせようと、キッチンにあったブランデーを与えた。彼女の興奮を押さえるため、それは有効な手段のはずだった。

それで、あのようになってしまったとは思ってもよらなかった。僅かな量でしかなかったにもかかわらず。

人間の体内にアルコールが吸収された時の様子は、何度も目にしたことがある。ただ、その個人差までは把握してなかったようだ。

波のように押し寄せる激しい感情。それまでの彼女からは考えられないものだった。

わたしは圧倒されながらも目を離さないでいた。

今やその体は本当にソファに沈んでしまっていた。まるで沈没寸前だ。

隣に座るわたしからは、彼女の長い波打つ髪とその背中しか見えなかった。その手はソファの背もたれをしっかりと握りしめていた。「横になったほうがいいんじゃないか？」

わたしの声にも反応がなかった。

眠ってしまったのではないかと顔を覗き込もうとした時、彼女は身動きした。

わたしの方を振り返る。頬は薔薇色に染まっていた。今までになく、しっかりとわたしを見つめる瞳には恐れも気後れも感じられなかった。

「あなたには分からないでしょうね。あなたは私じゃないもの。分かりっこないわ」

何か激しいものが彼女を突き抜けているらしかった。声はあくまで静かで優しげだったが。体が微かに震えていた。

「何を分からないって言うんだ。何のことなんだい？」

瞳に凍えるような光が走った。わたしは核心をついたらしかなかった。彼女は震えを止めようとするように、自らを抱きしめた。まるでそこに答えが転がっているというふうに床を見つめた。わたしが彼女の視線を追ってそこを見ても、もちろん何もなかったが。

「話してほしい。わたしは君を分かりたいんだ」

その言葉は彼女の心に触れるものだったらしい。一瞬身じろぎをして、彼女はわたしに視線を戻した。心を探るかのように、わたしの瞳を覗き込んでいた。

そして、小さな溜め息。安堵とも失望ともとれるような。彼女は口を開いた。

「父と母の話よ。すばらしい夫婦だったわ。そして、私を加えて素晴らしい家族だった。」

幼い頃から私の自慢だった。私の家族ほど団結があって愛情にあふれていたものはないはずよ。

私は確信していたの。この幸せはずっと続くものだって。私が年をおって、両親が自然な死を迎えるまで私たちは家族であり続けるって。

でも、違った。私が高校を出る頃だったわ。母が死んだの」

わたしは何か声を上げていたのかもしれない。フィリアの声は途切れていた。あのエリーゼが故人だとは考えもしなかった。わたし

に限らず、ヴァンパイアの時間の観念は人間とは違ったものなのだ。もつとも、悲しみはほとんどなかった。だいたい実感がなかった。わたしにとつて、エリーゼは力強く息付く印象の一つだった。彼女はわたしの中で輝きながら生きていた。

「母を知っているの？」

フィリアが怪訝そうに聞く。

衝撃の余韻。わたしの答えは随分遅れてのものだった気がする。

「ああ、まあね。随分前にね。彼女の死も君が娘だとも知らなかったんだ。でも、どうして亡くなったんだ？」

フィリアは目を伏せていた。彼女の瞳は、睫毛の下で霞がかかったようにどんよりと曇っていた。

「交通事故よ。人間なんてあつけないものね。私も父も母の最期を看取れなかった。」

父は憔悴していたわ。母の葬儀の時、今にも穴の底の棺に倒れ落ちるんじゃないかと思ったほど。

棺に土をかけることを父は頑として引き受けなかった。代わりに私がかしたの。

暗いシャベルの響き。土が棺を覆っていく。まるで悪夢のようだったわ。見ていられなくなった父は、悲鳴を上げながら後ろへ下がり、そして座り込んで大声で泣き出したの。何度も母の名を呼んでいた。牧師の声も耳に届いていないようだった。

あんな泣き方、私は見たことがなかった。大地を叩き、土をかきむしっていた。父の友人が取り押さえるのに随分苦労していたわ。

そして、一週間経ち、二週間経ち、私たちは暗澹とした思いで毎日をおすごしていた。父は本当に変わってしまった。いつも笑顔を浮かべていられた人だったのに。

私と父の会話が消えた。食事もただ黙々と食べるだけ。一緒の時間だつてとらなかった。

私は母の存在がどんなに大きいものだったのか、思い知ったわ。母こそ私たちの関係を取り持つ、大きな柱だったわけね。

父はいつも部屋に閉じこもりつきりだった。心配して訪ねてくる友人にも会おうとはしなかった。仕事もずっと休みっぱなしだったわ。私が学校から帰ってきてても、家にいるの。私は何も言わなかったし、言えなかった。

父はそれが気に入らなかったのかしら。お酒を飲むようになったわ。毎日、酔ってるの。足元がふらふらになるまで飲んだくれていたよ。昔の父からは想像もできないわ。

やがて外に出て行くようになった。仕事へじゃない。慰めてくれる女の人を求めて、お酒を求めて、出て行くの。

最初は夜遅く戻ってきていた。それが明け方になり、夕方になり、一日おき三日おきになったわ。

そして、彼は姿を消したの。この六年間、一度だって会っていないわ」

彼女の体が激しく震え始めた。クッションを手にとり、胸の前で握りしめても震えは止まらなかった。

瞳はぼんやりとし、宙を見つめていた。酔いからか悲しみからか、彼女の目は潤んでいた。

大きく息を吸い込み、吐き出す。何度か瞬きをして、彼女は“今”に意識を集中させようとしているらしかった。引き摺られそうになる激情を振り払うように、頭を振り、こめかみを指で押さえる。

それから、彼女の手は膝の上のクッションへ戻った。手さえ震えているようだった。

「私は母にはなれなかった。だって、あの人は人間離れしていたもの。まるで天使よ。揺ぎ無い大きな愛を持っていた。そして、それを無言で伝えることができるの。

彼女の周りには、常に温かい祝福のようなものが取り巻いていたわ。ああ、母でなく私が死んでいたら、父もあんなふうにならずに済んだはずよ。

母も父も次々に去っていった。二人とも裏切りのようにね。そして、友人や恋人も私は失ってしまった。

私は独りになった。本当の一人よ。何度か自殺も考えたけど、できなかった。

私には勇気がなかったし、赤の他人が何の感情を抱かず、私の死体を処理するなんて我慢できなかったの。

私は悟ったわ。一人になって、ようやく分かったの。それまで気づかなかったなんて、私は幸せで頭がどうかしてたのよ。幸せばけ……。なんて言葉かしら！」

フィリアは声を出して笑った。それもすぐに力を失い、消えていった。

沈んでいるソファの中で身じろぎする。膝上のクッションが床に転がった。彼女はそれをなんら気にしてないようだった。

わたしが足元に落ちたクッションを拾い上げた時も、彼女は何も言わなかった。

まるで力尽きたように目をつぶったままだった。わたしはクッションを見下ろした。それにはまだ彼女の熱が宿っていた。

わたしには彼女の話が終わったとは思えなかった。満足していなかった。

「悟ったって、何を？」

わたしは彼女のけだるさを感じながらも声をかけた。

彼女はびくつと震え、頭を背もたれに押し付けたまま、目を開いた。唇を軽く噛みしめている。

「結局、人は独りなのよ。失うものを求めて、どうするの？ 肉親でさえ去っていくのよ。他人に希望を見出すなんてことができるの？」

声は震えながらも大きくなり、彼女はソファから身を起こしていった。

「だって、みんな私の元を去っていくわ！」

彼女が頭をかきむしるような激しさを見せた。

彼女は泣いていた。赤くなった頬より、さらに熱い涙が流れていた。

両手で顔を覆う。髪が振り乱れていた。

わたしは“ランディ”を探す彼女を思い出していた。わたしもまた彼女の元を一度去っていた。

フィリアの悲痛な泣き声が耳に蘇り、そして今の彼女のものと重なり合った。

わたしは彼女を抱きしめたかった。今ならそれができるのだ。ネズミの姿であったとき、どんなに望んでもできなかったこと。わたしはフィリアを守りたかった。

しかし、わたしが抱き寄せようとする前に彼女は立ち上がった。足元がおぼつかない状態で。

ふらふらとして転びそうになる。わたしは素早く立ち、支えてやらねばならなかった。

彼女は涙で濡れる顔をそむけ、手をほどこうと抗った。わたしは離しはしなかった。

「眠るの。眠いのよ。眠れば……」

なおも手を振り切ろうとする。わたしは彼女の体を抱き上げた。

ぎょっとした彼女は腕の中で激しく暴れた。わたしは静かにするように囁く。床のガラスが危険だから、ベッドに連れて行くだけだ。

彼女は怯えたようにわたしを見上げた。それでも、わたしが視線を合わせると、幾分か落ち着きを取り戻した。唇は固く結ばれていたが。

ランドル3 (2)

寝室に入ると、漂う薔薇の香りに気づいた。

わたしの贈った薔薇がガラスの花瓶に入れられ、ベッドの傍の小さなテーブルに置かれている。花はちょうど盛りを迎えていて、固かったつぼみもまたほころびを見せていた。

彼女は薔薇をそばに置いてくれていたのだ。それは甘い香りとともに、彼女への思いをさらにつのらせた。

わたしはフィリアをベッドに下ろした。横たえた体にふわふわとした布団をかける。

彼女は、わたしの方を見ている。わたしは身を引いた。

「君が話してくれて、嬉しかった」

じつとわたしを見つめたままだ。

何か言いたそうにしていた。彼女自身、それがどういう言葉が分かっていないようだった。無言のまま頬にかかる髪を払っている。

わたしは再びベッドへ寄った。フィリアが見ているのを知りながら。その額に口付けていた。

彼女は体を震わせた。

「おやすみ」

そう言っ、わたしは体を起こした。

彼女に背を向ける。そう、もう退くべきだと分かっていた。

今すぐにもこの部屋から出て行き、また出直してくるべきなのだ。彼女もわたしも冷静でいられる日に。感情に流されずに話せる日に。

「あ……」

背後から小さく聞こえてきたフィリアの声。そして、彼女が起き上がる気配がした。

見てはいけない。今の彼女を見たなら……。

だが、わたしは振り返ってしまった。振り返らずにはいられなか

った。

薄闇の中の彼女は、なんと儂く見えるのだろう。ネズミの姿で見上げていた時とは、まるで違っていた。小さく頼りなげに見えた。ベッドにいるのに温かさを感じてはいないようだった。

彼女はわたしと目が合うと、まるで屈辱のようにつつむいてしまった。

「フィリア……」

わたしはもう迷わなかった。腕を伸ばして彼女を抱きしめる。

彼女は目を見開いてわたしを見た。息を止めたまま。愕然としていると言ってもよかった。

その瞳から涙が溢れてくる。

力を失ったかのように、わたしの腕の中にいた。わたしは彼女の存在を実感していた。

伝わってくる柔らかさ、そして温かさ。心臓の音まで聞こえてきそうだった。

フィリアはわたしの胸を押しした。肩でしゃくりあげている。

「こんなこと必要じゃないわ、私には……!」

それは叫びに近かった。彼女は体をよじり、わたしから逃れようとした。

だが、どんなに力を入れてもそれは無理なことだった。わたしは放す気はなかった。

「あなたも同じでしょう？ 私をおいて行くんでしょう？ それなのに……」

拳がわたしの胸を叩く。涙がぼろぼろとこぼれ落ちていった。

わたしは彼女の体を胸に押し付けた。もう少しで力の加減を忘れてしまうところだった。

身動きが全くとれなくなつたフィリアは、ただ泣くだけだった。

「おいてなんか行きはしないよ。君の元から去つたりしない。わたしにとって、君がどんな存在か、想像できるかい？」

わたしは彼女の髪を顎に感じながら言った。

「……本当？ 本当なの？」

体の震えが伝わってくる。わたしは腕の力を緩めた。彼女の顔を見ようと体を引く。

フィリアの手が伸びてきて、わたしの頬に触れた。彼女は涙に濡れた目でわたしを見つめていた。

「ああ、ミスター……」

手がわたしの首にかかり、彼女はわたしにすがり付いていた。

「ランドルだ」

彼女の背を抱く。

なんとこの感覚。彼女がわたしを抱きしめているなんて。背中のフィリアの手をどんなに熱く感じたことが。

彼女は何度もわたしの名を呼び続けた。この胸に顔をうずめて。

「離さないで。傍にいて。ずっと……」

「夜明けまで。……そして、明日も会おう」

わたしはくらくらするほどの幸福に浸っていた。

彼女の唇からこぼれるわたしの名前。こんなことが現実だとは。

こんなことが有り得るとは思いもしなかった。

どのくらい、わたしたちはそうしていただろう。時間など忘れ果てていた。

フィリアの手が力をなくし、わたしの背を滑り落ちていった。

彼女は眠っていた。この腕の中で。涙は完全に乾いている。とても安らかな表情に見えた。

彼女をゆっくりとベッドへ寝かせる。そして、その横に寝そべった。

フィリアの胸がゆっくりと上下している。栗色の髪が敷物のように彼女の肩を覆う。

わたしは片肘をつき、彼女を眺めた。

白い肌と髪と同じ色の長い睫毛。薄い紅色の唇。今にも彼女が目を開きそうな気がした。実際、彼女が起きて、わたしの名を呼ぶ姿を見たような……。

彼女の眠りに引き摺られるように、いつの間にかまどろんでしまった。気持ちのよい、うとうとした感覚。暖炉を前にした語らいのように安らかな。

突然、何かの信号がわたしの体を貫く。

“警告”

わたしは現実に取り戻された。はっと目を開き、体を起こして背後の窓を見やる。

静寂の中、暗闇に包まれた家々。黒々として影のように立つ木々。ぼうつとした光を放っている街灯。

まだ外は夜に覆われているが、朝の気配はすぐ近くまでやって来ている。

人間には、この微妙な変化は分からないだろう。ざわざわとした、とても小さな生き物の大群のように近づいてくるのだ。わたしたち、ヴァンパイアの永遠の敵。かなうことのない敵。

わたしはこの時ほど、朝の訪れを疎ましく思ったことはなかった。永遠に夜が、この平安が続いてほしかった。

だが、もうゆっくりとはしていられないことは分かっていた。夜明けは確実に近づいているのだ。

わたしはフィリアを振り返った。彼女は眠り続けていた。布団から腕が出ている。それを直そうと彼女の手をとる。

肌の温もり。そして流れる血、脈。わたしは知らずのうちに、その手をじつと見つめていた。胃がきりきりと痛んだ。体中の血管全てが一瞬収縮した。

ひどく頭痛がする。わたしは飢えていることに気づいた。そういえば、今夜はまだ満たされていない。あの憎らしい借金取りの男から、もう少し血を奪えばよかった。

わたしは大急ぎで彼女の手を布団の中にしまった。

わたし自身、認めたくないことだったが、わたしは彼女が欲しかった。彼女の首筋に、牙を突き立てたかった。彼女の血を味わいたかった。

近年のイギリスに住むヴァンパイアのほとんどが、人間の命を奪わずに血だけを狩っていた。もちろん、牙の跡を残すような下手な真似はしない。

それでも、外見上はまったく傷のないように見える犠牲者も、わたしたちの目を通せば、見えてくるのだ。首筋に浮かぶ、肉色に染まる2つの傷跡。

それはある意味、自己主張のマーキング。自分のものだと仲間達に知らせるためのもの。

わたしはフィリアに印をつけたかった。彼女がわたしのものだという印。それは血を吸いたいという欲望より勝っていた。

彼女の首へと顔を近づけた。血管を流れる血がわたしを誘惑した。それはわたしに向かって懇願していた。早く血を吸ってくれと……。早く、早く。

わたしは牙をむき出しにし、彼女に覆い被さった。彼女の首筋しか見えないほど近寄っていた。

唇が触れる。だが、わたしは牙をたてなかった。代わりにキスをした。長く力強く。フィリアが呻いて、首を反らせてもやめなかった。ようやく唇を離れた時、彼女の首筋には赤い小さな“印”ができていた。わたしは再び欲望に突き動かされる前にベッドから離れた。

彼女を一度だけ振り返り、それから背にする。つけっぱなしのリビングの電気を消し、わたしはフィリアの部屋を出た。

外気はとても冷たかった。夜明け前の冷え込みだ。今のわたしには、ぼんやりとしか感じられなかったが。

わたしはフィリアとの時間を思い返していた。彼女がわたしにすがってきた時のことを。

明日という日を待ち遠しく思った。たった今、彼女と別れてきたばかりなのに、今すぐにも会いたかった。

『これを恋といわずして、なにをや云わん』

わたしは、オペラのように両手を広げて、歌いだしかねなかった。

凄まじいスピードで通り抜ける、車の音さえ何も耳に入っていないか
った。

ランドル3 (3)

夜明けは近かった。東の空の闇が次第に薄くなっていく。

わたしは屋敷にたどり着いていた。白い壁のごく普通の館で、人間のヴァンパイア映画に出てくる類のものではなかった。

中に入り、廊下を抜けて、重い隠し扉の向こうの地下室への階段を下る。

地下室は広く、いくつかの部屋に分かれていた。日の光が絶対に差し込むことのない快適な部屋部屋。

煉瓦壁の廊下は暗闇に満たされていた。それでも、わたしは自分の部屋の扉近くで何かが動くのを見て取り、立ち止まった。そこにいたのは、ナイトだった。

白いシャツを身に着けているナイトは、こちらへ向き直った。黒っぽいベストのおかげで、首と白い両腕だけがふわりと宙に浮いているように見えたものだ。

彼はわたしに纏わりつくような視線を投げかけていた。

異様なほどの静けさ。沈黙が永遠に続くのではないかと思った時、彼が口を開いた。

「随分と遅いお帰りじゃないか。お前にしてはな」

ゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

「心配して待っていてくれたって訳か？」

口にしたものの、そうではないことは分かっていた。

彼は過保護な父親ではなかった。同じ家に住むというのに、鉢合わせになることもそうなかった。何日ぶりだろう。こうして向かい合うのは。

ナイトは微笑みをもらした。ゆっくりと首を横に振る。だが、それも一瞬のことだった。にわかにはその表情は失われ、冷静な観察者のような目に戻っていた。

「あの娘の所に行っていたのか？」

声さえも色を失ったようだ。

わたしは答えることなく、彼を見返すだけだ。

彼はわたしの傍まで来た。琥珀色の瞳は鮮やかな光をたたえている。

「恋は狂気だとはよく言ったもんだな。約束を破り、警告を無視するなんて、お前らしくないじゃないか。まったく……」

「お膳立てをしたのは、そっちだろう」

冷静を努めて言い返す。感情的になって揚げ足を取られるのは御免だった。

「あれはきつかけに過ぎなかった。お前は拒否することもできたんだ。遅かれ早かれ、お前は彼女の元を訪れていただく。あの子を使うまでもなく、いつかそうなっていたさ。お前の決心は、結局その程度のものだったということだ」

ラヴェル作曲の『ボレロ』のように、その声は次第に力強さを増した。わたしを挑発しているのではないかと勘ぐったくらいだ。もっとも、ナイトはいつもこんな感じだったが。

黙り込むわたしに向かって、彼は言葉を継いだ。

「彼女とは別れる。記憶を消して、なかったことにするんだ。今ならまだ間に合う」

まだ間に合う　その言葉は、見事に外れているように聞こえた。今となつては、彼がネズミ姿をしたわたしの前に現れたときには、すでに遅かったのではないかとさえ思える。

わたしは口をつぐんだままだった。

「ランドル！　お前のためばかりじゃない。彼女のためでもあるんだぞ」

肩に手がかかる。そう背が違わないせいで、彼の顔を正面から見つめることになった。

そこにあつたのは怒りではなかった。強い口調にもかかわらず、その表情は気遣いに満ちていた。いつもの飄々とした雰囲気はどこへ行ってしまうのだろうか。

わたしは彼の手をそつと払った。

「フィリアはわたしが守る」

「……なんだと？」

ナイトは愕然とする。

「彼女はわたしを求めてくれた。傍にいてほしいと。わたしはそれに応えたいんだ」

彼はかぶりを振った。何か否定的な言葉をぶつぶつ呟きながら、背を向ける。片手で髪をかき乱しながら、溜め息をついた。

「彼女が求めているのは人間のお前だぞ」

「自分が何者なのかはよく分かっている。フィリアには明日会ったとき、全てを話すつもりだ」

指先を髪に食い込ませたまま、彼は床を見つめていた。それから微動だにしない。わたしの言葉は届いているのだろうか。

「覚悟はできているってわけか？」

遅れての苦々しい声。こちらに背中を向けたまま。

「ああ」

わたしの答えに、彼は顔を上げた。肩越しに振り返る。横顔が見えた。そう思ったときだった。次の瞬間、姿を見失った。

身構えることもできなかった。気が付いたときには、壁に叩きつけられていた。

衝撃に息を詰まらせる。前屈みになろうとする身体を肘で押さえ付けられた。その両眼に宿る光は鋭く、今まで見たこともないようなものだった。まるで眼で射殺そうとするかのように、わたしを見つめている。瞬きをすることさえ、はばかれた瞬間。

「本気なんだな？」

再び彼は聞いた。感情が一切失われてしまったような、聞くものを凍りつかせるような声で。唇からは牙が覗いている。見るものを脅かす白い牙。

「……選ぶのは彼女だ」

声を詰まらせながら、ようやくわたしは答えた。

ナイトの喉から唸り声が漏れる。そして、彼は手を離れた。わたしから離れ、通路の中央に立つと天井を仰ぎ、そして……。

「ああ、もう！」

彼は大きな叫び声を上げながら、両手を振り下ろした。

「止めようがないじゃないか。迷いがないんだから」

それは誰に向かっての言葉だろう。彼はわたしに振り向いた。

「それに、その分じゃ止めたって聞きやしないだろう。俺がどれだけ脅したとしてもな」

再び近づいてきて、わたしの顔を覗き込む。ほとんどキスでもしそうな勢いだっただ。

「それだけ強い思いがあるなら、彼女の全てを奪ってでも、連れて逃げちまえて言いたいところだが……。それはお前の本分じゃないだろうしな。それだって聞く気はないんだろう？」

右手が眼前に持ち上がる。わたしは思わず、壁に頭を押し付けた。幼い時分の記憶が一瞬のうちに蘇ったのだ。

乾いた小枝を踏み割ったような音がする。彼は人差し指でわたしの額を弾いていた。

「だいたい、お前は子供の頃から頑固だからなあ。誰に似たんだろう。俺じゃないよな」

いたずらっ子のような表情を浮かべる。

先ほどまでとは一変していた。驚いたことに彼はわたしに微笑みかけた。

疼く額に手をやりながら、未だにわたしは、壁に身体をもたせかけたままだった。

彼は何かを思い出したように、目を細めていた。おそらくそれは母のことだろう。彼にこんな表情をさせることができるのは、彼女だけなのだ。

冷え冷えとする壁からやっと離れた時、ナイトは天井を仰いでいた。

高さのあるアーチ型の天井。強まっていく朝の気配。当然、彼も

それを感じているはずだ。天を見つめるナイトの瞳が輝いて見えた。まるでろうそくの焔のようだ。ちらちらと燃え盛っている。

ナイトは再びわたしに背を向けた。欠伸のような声を上げて、彼はその場で伸びをした。気持ちの良さそうな唸り声。背を反らし、姿勢を整えてから、振り返って言った。

「もう寝るか。夜明けだぞ」

彼は微笑みを浮かべていたようだった。それも、すぐに身体を戻してしまったために、見えなくなってしまったが。

彼は歩き出した。

冷やかに響く足音に、わたしはエリーゼのことを話し損ねたことに気づいた。だが、彼をとどめる気にはなれなかった。今、彼に話す必要はないように思われた。死は永遠に継続していくものなのだから。

それを今日話そうが、明日話そうが、事實は変わらない。不死に近いヴァンパイアにとって、死の捉え方は人間とは違っていた。わたしたちには遠い現実だった。

わたしはドアを開いて、部屋に入った。

壁際に置かれたテーブルの上のライトスタンドを点す。ヴァンパイアらしくないと思うが、光を見るのは嫌いではなかった。エリーゼの影響だろうか。

上着を脱ぎ捨てて、ベッドに腰掛ける。

飾り気のない、眠るためだけの部屋。窓もなく、大きな棺を連想させる部屋。冷たい石壁を壁紙が隠してしまっている。それでも、四方から朝の冷気が包み込んでいるのを感じた。特有の泥のような倦怠感が襲ってくる。

程よい硬さのマット。わたしは横になった。狭く、固い繻子張りの棺の底に比べたら、どれだけ心地よいことか。もつとも、今やヴァンパイアが棺を用いるのは、それほど多いことではなかった。

夜明け間近で、眠気は強まっていった。うんざりするような睡魔

に襲われていた。

ライトを消すこともままならなかった。シーツを引き上げること
もできずに、わたしは眠り込んだ。

棺よりもはるかに安全で、太陽の光を完璧に遮ってくれる部屋の
中で。

フィリア3 (1)

何かがきらきら光っている。とても眩しい。目にしみるようだ。手をかざしてそれをさけようとすする。

そうして、私はようやく目を開いた。

カーテンを開けたままの窓から、朝日が差し込んでいる。夢うつつでそれを眺めた。

サイドテーブルの時計が目に入る。次の瞬間、私は飛び起きた。

時計は七時をとくに回っていた。どうして、ベルをセットしておかなかったのだろう。まだぼんやりとしている頭でそう思った。

服をクローゼットから取り出し、着替えようとするが、なかなか思うに任せない。未だに頭は目覚めてないかのようなのだ。よたよたしながらも何とか服を着終えた。

冷蔵庫には、まだミネラル・ウォーターがあっただろうか。冷たい水を飲めば、気分もすっきりするかもしれない。そう期待して寝室を出た。

リビングに来て、その様子を見たとき、私はショックを受けた。散乱したガラスの破片が朝日を受けてきらめいている。

そういえば、昨日父の借金取りの男が来て、部屋をひっくり返していったっけ……。

片付ける暇などなかった。

キッチンで水をコップに注ぎ、一息で飲み干した。

急いで洗面所に駆け込む。顔を洗い、歯を磨きながら髪を梳かす。化粧もちゃんとしなくては。

鏡を覗き込んだ時、私は息が止まるかと思った。鏡の中、首筋に紅色のしみのようなものができていたのだ。

同時に昨夜のことが走馬灯のように一気に思い出された。鏡の中の顔は、みるみると火でも吹き出そうに赤くなった。

あの時の私はどうかしていたに違いない。あんなふうの人に頼り、

泣き言を口にするなんて。まったく自分らしくないと思う。いくらお酒が入っていたにしても、あれほど取り乱すなんて。

ランドルはどう受け止めたのだろう。これは明らかにキスマークだった。

首筋へのキスなど恋人同士のすることだろう。少なくとも、昨日今日出会った者のすることではない。彼は、一体どういつつもりでこんなことを……。私は混乱してしまった。

首筋を力強くこするが、消えるものではなかった。自然に消えてしまうのを待つしかない。そして、私には時間がなかった。

寝室に戻り、クローゼットからハイネックのセーターを取り出して、再び着替える。こんなもの、生徒に見つかれば、何を言われるか分かったものではない。

リビングを走って横切り、洗面所へ。髪をいつもより簡単に編み上げ、化粧をしてから部屋を出たのは、八時近かった。いつもより三十分は遅れている。

セーターの襟を引き上げながら、朝の賑わいを見せる通りを走り始めた。

なんとしても学校に遅れるわけにはいかなかった。それこそ、生徒達の話の種になってしまう。

生徒に呼び止められるたびに、ぎくりとして過ごす一日がどんなに長かったことか。

同僚の声にさえ、神経を尖らせていなければならなかった。

こんな時に限って私を呼ぶものが多いのだ。一年先輩のルース・ピケットにさえ、それは当てはまった。

彼女は朝、学校に駆け込んできた私をじっと見ていた者達の一人だった。もつともルースだけだったが。私にいつもより遅れた理由を聞いたのは。

それはざわざわとした昼休みのこと。

「ちよつと寝坊しただけよ」

私は平静を努める。ルースは不思議そうに私を見ていた。教師と
なつてから、私は遅刻などもちろんのこと、時間ぎりぎりに来たこ
とはなかった。

「夜更かしてもしたの？」

彼女の何気ない言葉に私は動揺しそうになつた。

ランドルのことやキスマークのことから、意識をそらせようと懸
命だった。体が熱くなるの静めようとした。周りの色々な気配が私
に向かつて押し寄せてくるような気さえた。

さまざまな音。明るい光。にぎやかな空気。人の存在から漂う香
り。ごちゃ混ぜになつて。

まるで、正反対だ。全ての授業が終わつた後。生徒のいない、静
まり返つた校舎。

柔らかい夕焼け色の西日が窓から注ぎ込んでいる。残つた教師達
が所々で、ほそぼそと雑談を交わしている。コーヒーが微かに香る。
ルースが近づいてきた。夕日で彼女の黒髪の縁がきれいな褐色に
見えた。

ソファに座る私の隣に彼女は腰を下ろした。私は改めて見つめる。
「一緒に夕食でもどう？」

黒い瞳に私の姿が映っていた。彼女の目を覗き込む私。不安と微
かな疑惑のこもつた表情。私は慌てて彼女の瞳から視線をそらした。
ルースが首を傾げて私を見ている。

断る理由はあつた。昨夜、ランドルは言つていた。「明日も会お
う」と。彼がまたやって来るだろうと考へなかつたわけではない。
それでも、私は彼女の申し出を断らなかつた。

それは、自分の犯した過ちどころか、それをさらしてしまつた彼
の存在さえ否定したいという、愚かな意識ゆえかもしれなかつた。
私たちは肩を並べてスタツフルムを出た。同僚達は好奇心を隠
しはしなかつた。興味深そうにこちらを見ていた。このことが彼ら
の話の種になるのだろうと私はぼんやりと考へた。

あえてゆっくりと歩く。後ろは決して振り向かなかつた。 > k i

br<背後で、声をかけてきた同僚に別れの挨拶をするルースの声が響いた。

煉瓦の階段を下り、中庭まで出た私がどれほどほっとしたことか。さまざまな色を持った空がとても近くに感じられた。

ルースはどんだん歩いていき、置いてきぼりの私を呼んだ。急いでくるようにと、手を振っている。その焦りを私は感じていた。

私は足を早め、彼女に追いついた。

フィリア3 (2)

長い二つの影が芝生の上を動いていく。影は煉瓦、石畳に移って行った。

私達は街へ出ていた。行き交う車の何台かがライトを点している。薄闇が街を包もうとしていた。

完全に日が落ちる前、ルースの知っているレストランに入った。洒落た店内。壁にかけられた絵画に落ち着いた音楽。テーブルの上には一輪挿しのラツパ水仙が飾られている。

料理の匂いと人々の柔らかい話し声。

ウェイターがやって来て、席に案内してくれる。

ルースの後ろに続く私は少なからず緊張していた。こんな店に来るのは久しぶりだった。

「ルース！」

聞き覚えのある声。あの本屋の店員、クレバー・ストロークだ。彼がテーブルについたまま、こちらに手を振っている。薄い紫色のスーツを身につけていた。そんな格好を見たのは初めてだった。別人のようだ。

ルースは私の腕を引っ張って、彼のテーブルへと近寄った。立ち上がった彼が私の席を指し示す。

彼らは私を何もできない子供のように扱った。ルースは私が椅子に座ってから、ようやく自分の席に腰を下ろした。続いてストロークも席につく。

私はこの展開についていけなかった。彼らの意図が分からなかった。

ルースが肩越しにウェイターと話している。

テーブルに肘をつき、重ねた手に顎を乗せたストロークは、にこやかな笑顔を浮かべている。私も笑い返すしかなかった。

ルースが座った椅子を引き寄せる。彼女の視線が私と彼を行った

り来たりした。

「さあ、始めましょう」

その声は嬉しそうでもあった。

ストロークの笑いが消える。彼は手をテーブルから下ろし、背もたれに寄りかかった。

瞳が急に遠くなった気がした。

ルースが腕をつつく。彼は慌てて背を起こし、咳払いした。唇から握りこぶしを下ろして、テーブルへ置く。

「単刀直入に言おう。付き合ってほしいんだ、フィリア……さん」
テーブルの上で彼の手が開かれる。

私は言葉を返せなかった。彼とルースを交互に見た。そして、視線を一輪挿しに落とす。

白い花卉に淡いクリーム色のカップ。しっとりとした優しげな花だ。料理の匂いを邪魔しない、ほとんどなきに等しい香り。丸みを帯びたガラスの花器に飾られている。

私はもう二人に視線を戻せなくなってしまった。花器の下のレースを観察するようにじっと見るしかない。ルースが身動きしたのが分かった。

「考えてみてもいいんじゃないの？ 私、あなたを見ていられないって感じる時があるの」

ウェイターがワインの入ったバスケットとグラスを持ってきた。

そのおかげで、私はテーブルから目が離れた。それらが置かれるのを見守った。

ルースが立ち上がる。膝の上の上着とバッグを手にして。

彼女はウェイターと言葉を交わした。会計票を受け取る。

「あなた達はゆっくりしていきなさい。ワインを有意義に使うのよ」
ストロークが席を立った。彼女の手の紙を返してもらおうとする。だが、頑としてルースは聞き入れなかった。

私に手を振り、ストロークから逃げ出すようにテーブルを後にした。残された彼は息をつきながら席に戻った。

ウェイターが最初から二つしか用意していなかったグラスにワインを注ぐ。グラスがそれぞれの前に来て、ウェイターが去ってから、私は初めて口を開いた。

「どうということなんです？」

ストロークはグラスを手に取り、一口飲んだ。味わうように目を細め、私に飲むように勧める。

私は手を膝の上に押し付けたままだ。すると、彼はグラスを下ろし、席に深く座りなおした。

「たまたま、僕達の友人が共通していたんだよ」

それは知らないことだったが、考えてみれば不自然なことではなかった。彼女の家は私のマンションからそう遠くはなく、また、その辺りで本屋といえば彼の勤め先くらいなものだった。

彼は微笑んでいる。レストランのふんわりとした明かりの中、その表情は余計優しげに見えた。口調もいつもより柔らかいものに聞こえた。

「彼女はこういったつもりなんです？」

私はそういう雰囲気のためらいながらも聞いた。

「君が気になるみたいだね。僕もそうだった。でも、彼女のように考えられなかった。こういう発想は女性のほうが得意なのかなあ。つまり、付き合うつてことさ。彼女の持論で言うなら、交際しているのは人を豊かにさせるものらしい。僕は君が気になっていた。だから、彼女の言葉に耳を傾けたんだ」

彼は慎重に言葉を選んでいった。

それでも私が察するには十分だった。これはルースのお節介に始まっていることだと。

彼女が残っていたワインに目をやった。バスケットの中でクロスに包まれ、汗をかいているボトル。光が反射して、液体の水面が光って見える。

「私達は友人だと思っけれど。それじゃ不十分なのかしら」

「随分、広い意味の言葉だからね」

ボトルから目を離さずに言った私の意図を彼は感じ取っていたようだ。

「すぐに返事をもらおうなんて思っていないよ。今日は食事だけでもいいこう。君と食事するなんて初めてだよね」

そういえば、そうだった。私達は本屋の前で言葉を交わすだけの間柄だった。私は先ほど、そんな彼との関係を友人だと言ったことを考えていた。

口をつぐみがちな私を、彼はフォローしてくれた。食事の間中、彼はいつもにも増して自分から話を持ちかけていた。

私はそんな彼に感謝しながら、胃にさっぱり溜まった気がしないままに料理を口にしていった。フランス料理だかなんだったか、味さえよく分らずじまいだった。

フィリア3 (3)

そんなわけで、私のマンションの前で彼と別れた時、日はとつぷりと暮れていた。腕時計は九時少し過ぎをさしていた。

エレベーターの奥の壁にぴったり背を押し付けて、私は部屋のあ
る三階まで上がった。

ベルが鳴り、扉が開く。廊下に出た時、部屋の前の人影に気づいた。

乳白色の電球の下で立っているのはランドルだった。白いシャツに黒の上着。彼が暗闇の中で背を向けたなら見つけることはできないだろう。

私は無意識のうちに、キスマークのあった首筋を押さえていた。彼は今まで見た中で、もっとも優しく微笑んでいた。私の名を呼び、こちらへ近づいてくる。

私は立ちすくんだ。彼の瞳には魔力があるようだった。人を引きつける魔力。それでも、彼が実際に近づいてくるのだという実感は強かった。

体が熱くなるのを感じた。冷え切った指先まで汗ばんでくるような。私は早く部屋に入りたかった。彼がいなければどれだけいいかと思っただ。

部屋に向かつて一步を踏み出す。すると、ランドルの瞳が震えたようだった。魔力はみるみる失われていった。

彼はしっかりと口をつぐんで、傍を通り過ぎる私を見た。瞳は見開かれ、失われた力を取り戻そうとしているかのようだった。

首筋を押さえていた手で、シオルダーバッグの中をまさぐり、鍵を取り出そうとした。

彼の存在など忘れてしまいたかった。鍵が見つかり、鍵穴に差し込んだとき、私の肩が掴まれた。私は彼の声を聞く前に言った。

「昨日の夜のことは忘れず。だから帰って下さい」

銅色のドアノブを見つめた。裸電球に照らされて鈍い光を発している。

ランドルは何も言わなかった。辺りは静まり返っていた。注意を傾ければ、彼の息の音さえ聞こえそうだった。

沈黙と静寂。それは私の不安をかきたてた。

「私は母とは違うわ。もし、あなたが私の中に母を見つけようとしているのなら……」

冷静さを保つように早口で言う。それはこの場で思いついた言葉だったが、そうであれば合点がいくと思った。

美しく、誰からも好かれていた母。私は何も受け継いでいなかった。その輝く金の髪も。清水のような青い瞳も。母のイメージで娘の私をとらえようとした人たちが一様に見せる失望の色。彼がそう感じないと誰が言えるのだろうか。

不意に肩の上の手に力が入った。力任せに私を振り向かせる。

肩が一瞬痛んだ。私は彼と至近距離に向かい合っていた。電球の光が逆光になって、顔に影をつけている。まったく感情が読み取れなかった。私は恐ろしささえ感じ始めていた。

「覚えてないのか？ 昨日の晩のこと、わたしを求めてきた時のこと、わたしに傍にいてほしいと願ったこと……」

ゆっくりと区切るように彼は言った。私に言い聞かせるように。

私自身の発言を改めて考えさせようとするように。

「覚えてるわ。でも、あの子の私は……」

自分でも声が上がっているのを感じる。どうして、これほど心が乱れるのだろう。昨夜はお酒が入っていた。ただ酔っ払って口を滑らせただけなのだ。心にもないことを言ってしまった。そのはずだった。

彼はゆっくりと瞬きをし、わずかに体を起こした。光のさした彼の瞳の色が沈んで見える。深淵を思わせる瞳の光が奥に引っ込んでしまったようだ。

ベッドの上での自分が思い出されたのは、そんな瞳を覗き込んで

しまったからかもしれない。顔が赤くなるのが分かった。

首筋に改めて触れる。ここにあったキスマークは何を物語っているのだろう。

「あれは君の本音だった。だから、わたしはここにいるんだ」

彼の言葉には確信がこもっていた。それはますます私を混乱させた。

「あなたに何が分かるっていつの？」

私は自分でもぞっとするほど、ヒステリックに叫んでいた。彼は目を細めて、つくづくと私を見た。沈黙の間。壁を伝わり、床を這う冷気だけを感じた瞬間。

彼は呟くように言った。

「わたしはヴァンパイアだからね」

私はあつけにとられた。彼の正気を疑ってしまった。白い肌や閉じられた唇をまじまじと見た。曇ってしまった彼の瞳を見た。黒い睫毛と眉毛、細い髪の毛も見た。

何処にも彼がヴァンパイアであるというものは見られなかった。

私は、これはジョークではないかと考え付いた。私をからかっているのではないかと思った。ルースにしろ、ストロークにしろ、今日はなんて日だろう。

「伯爵はトランシルバニアにはお帰りにならなかったのね」

精一杯の皮肉を込めた言葉。彼はぼんやりとした。数秒後、やっとな分かつたらしい。その瞳が微かに揺らいだ。

「あのヴァンパイア小説か。誤解の源。作られた偽り。わたしたちと現実を阻むものだ」

静かな掠れたような声。私の背筋に冷たいものが走った。それが彼の狂気からか、それともヴァンパイアの影ゆえなのか分からなかった。

彼が私に暴力を加えるなんて、どうしてもイメージがわかなかった。

「現実の私は、おそらくクレバー・ストロークと付き合うことにな

ると思うわ」

そのイメージに甘えて私は言った。彼に漂う静けさに触発されたといいてもいいかもしれない。

次に起こることなど想像もしていなかった。彼が何をすることも分からなかった。

低い唸り声が入った。獣そっくりの唸り声。

彼が私に飛びかかってきた。乱暴にドアに押し付けられる。軋むドアの音が悲鳴のように聞こえた。

凍りついた私の眼前で口を大きく開けた。人間のものとは思われない鋭い犬歯が見えた。

私は息が詰まってしまった。声をあげることができない。

「……これが現実なんだ」

呻くような声。彼は唇をほとんど動かさずに言った。

フィリア3 (4)

ランドルの指先がセーターの襟を引っ張る。そのまま顔が私の首筋へ沈んでいく。

唇が肌に触れた。鳥肌の立つような感覚。そして、歯の感触。

私はこのとき、ようやく事態を知った。私がどうなるのか、そして、彼が何をしようとしているのか。

私は悲鳴を上げた。彼の胸を押しして離そうとする。

唸り声が私を威嚇した。

皮膚の圧迫感。首に彼の牙が沈んでいくところが想像できた。

私は絶叫した。自分の声で耳がどうかなるほどに。

彼の腕が私の体をしっかりと捕らえていた。支えを失った人形のように、のしかかってくる。彼の重みで私はドアにもたれたまま、ずるずるとしゃがみこんだ。

それにつれてランドルも腰を折る。私の首筋から唇を離すことはなかった。

鋭い痛みが走る。

私は彼の襟元を握りしめた。

「ランドル……！」

それは言葉として発せられたものではなかった気がする。

彼のシャツを握る手に思いのほか力が入った。手のひらに自分の爪が刺さるほどに。

裂ける音がしてシャツのボタンが飛び、彼の胸元があらわになった。

いつの時か、重みを感じなくなった。彼の体の重み。実際、いつ彼が唇を離れたのか分からない。

気が付くとランドルは私を押しやっていた。よろよろと廊下を斜めに進み、壁に肩をぶつける。

髪の毛に指先を食い込ませるようにして額を押さえていた。

肩で細かく息をしている。数分前の彼と別人のようだ。壁に手を付き、どうにか立っている状態だった。電球の白っぽい光がなんと彼を弱々しく見せたことか。

「そうだ。これこそ現実なんだ。わたしは人間じゃない」
見えるのは彼の後ろ姿。打ちひしがれているようだった。

私は足を投げ出して床に座り込んでいた。恐る恐る首にやって手を見てみると、血がにじんでいた。痛みはほとんど感じなかった。大した傷にはなっていないらしい。

夜の冷気が感覚として戻ってきた。遠くでパトカーのサイレンが聞こえる。

先ほどのことが現実だとは思えなかった。だが、彼は私の前にいた。私に背を向けたままで。

肩の傾斜はいつもに戻り、息遣いもまったく聞こえなくなった。彼が生き物として存在しているのか、不安に思ったくらいだ。

すると彼は不意に身動きした。ゆっくりと体ごと振り返る。髪は乱れていたし、目は伏せられたままだった。唇から溜め息がもれる。「だが、君を愛している。君には本当に幸せになってほしいんだ」
彼はちらりと私を見た。青い瞳が鈍く光った。私は彼と視線を合わせる事ができなかった。先の床を見つめるだけだ。

踵を返す音と衣擦れの音が聞こえた。続いて足音とドアの開く音。顔を上げたとき、彼の姿はもうなかった。非常階段のドアが遅れて音を立てて閉まる。

それから、金属の階段を踏む音がやたら響いて聞こえた。

それが私を責める音に聞こえたのかもしれない。それとも彼の感情が私に移ってしまったのだろうか。

私はぼんやりとした感傷に包まれていた。心に荒涼とした風が吹き渡っている感じだった。

冷気を全身で感じながら、私はようやく立ち上がった。床に落ちてしまったバッグを拾い上げる。鍵穴に差し込んだままの鍵を回し、部屋の中へと入った。

廊下よりさらに暗い空間がそこにあった。はかなげな月光が窓から降り注いでいる。朝、そのままにしていたガラスの破片が冷たく輝く。

廊下より差し込む長細い光が、それはそれは大切なもののように思えた。

私は壁をまさぐり、電気を点けた。

部屋に光があふれたら、この感覚は消えると思った。

だが違っていた。赤々と照らされた部屋がなんと寒々しく感じられるものか。私は今日まで気が付かなかったのだらうか。毎日この部屋を見、この部屋で暮らしているというのに。

部屋全てに電気を点けて回り、テレビのスイッチを入れると、気分も収まってきた。

私は知りうる限りの陽気な歌を口ずさみながら、ガラスの破片やつぶれた箱を片付けた。昨日のことも先ほどのことも考えないようにした。ただ、片付けるだけ。

歌をハミングに変え、シャワーを浴びる。何度も同じフレーズを繰り返す。

寝支度を整えた。寝室以外の電気を全て消し、お化けにおびえる子供のようにベッドに飛び込んだ。いつもなら、眠るときは消してしまうベッドサイドの電気も今日は消せなかった。

私は布団を引き上げた。ひんやりとしたシーツの感触。体を丸め、早く温まろうとする。

その時だった。私は胸苦しさを覚えた。心臓が一瞬縮んだような感覚。

そして、私は感じた。私を抱きしめる腕の感触と温かさの幻を。額に押し付けられた唇の感触が蘇ってくる。

彼の薔薇が一枚、花びらを散らすのが見えた。サイドテーブルには花びらが重なって落ちていた。

私の心は、かき乱された。実感した。今の私が彼をどう感じているかと、あの時、彼の傍にいた私は幸せだったのだらう。

少なくとも、孤独ではなかったはずだ。今の私のように電気を点けたままでないと、眠れないということはなかっただろうし、寒さも感じてなかったに違いない。

彼を追い立てた私は、独りだ。誰の魂とつながることもなく。

私は目をつぶり、眠ろうと努力した。早く眠りに着きたかった。夢を見たかった。夢の中で開放されたかった。

何の制約も受けず、本当の自由を手に入れられる夢の中。

ベッドに横たわり、待っていると、夢のほうから近づいてくる。軽い足音を響かせて。

私は喜び勇んでドアを開け、それを迎え入れた。抱きしめて、キスでもしてやりたい気分だった。

ランドル4

あの夜のベッドでの出来事。あれはわたしの錯覚だったのだろうか。

伝わるフィリアの体の震え。背中に回された熱い手。これまでになく彼女を近くに感じ、この腕に抱きしめた。あれらは皆幻だったというのか。

彼女の言葉に動揺し困惑したわたしは、思いもかけない形で自分の正体を明かしてしまった。

そして、彼女を傷つけた。最も軽蔑してきた下賤なやり方で。それが、どれほどわたしの心を打ちのめしてしまったか。

わたしに彼女を守ることなどできるはずもない。

昼間も彼女を守り、支えていくことができるのは、わたしではない。父の言ったことは正しかったのだ。

人間に必要なのは人間。彼女の唇からもれたクレバー・ストロークという名前の。

それはいったいどんな男なのだろう。

いや、そんなことを考えてどうする。彼女が幸せであればそれでいい。その男と幸せになれるのであれば、わたしは……。

「ランドル……」

フィリアがわたしの名を呼ぶ。

彼女は目の前に立っていた。満天の星空の下、月に照らされる丘の上で、わたしたちは寄り添っていた。

明るい月の光に、彼女の髪が波打つ海原のように煌く。滑らかな栗色の髪。身にまとったスリッドレスは、わたしたちの正装でも用いられる紅い色だった。

「綺麗ね。本当に綺麗」

彼女は溜め息混じりに呟く。

丘には白百合が一面咲き乱れていた。甘い香りが漂っている。風に吹かれて揺れるたび、その香りは増すようだ。月の光に照らされて、それは幻想的な光景だった。

「ありがとう。連れてきてくれて」

フィリアは微笑んでいる。わたしに向けられた微笑み。

「君に見てもらいたかった。きつと喜んでくれると思ったんだ」

わたしは近くの百合を手折り、捧げた。彼女はそれを大事そうに受け取ると、匂いを嗅いだ。甘い香りが濃くなる。

わたしはその香りに溺れてしまいそうになりながら、そっと彼女を抱き寄せた。艶やかな髪に口づける。

彼女は身じろぎした。手にしていた百合が地面に落ちた。それに気づき、わたしは体を起こした。

「……ランドル」

彼女の唇がわななく。

「お願い。キスならこっちに……」

声さえ震えている。髪を片側に寄せて、彼女は無防備に首筋をさらした。

思わず言葉を失う。

紅い衣から覗く肩や項は月の光を浴びて、輝きを放っているように見えた。そして、しみ一つない彼女の首にはその白さを穢す二つの傷跡があった。何によって傷つけられたものかは、すぐに分かった。

彼女は潤む目でこちらを見つめている。わたしは茫然と立ち尽くすだけだ。

「あなたは私に印を付けてくれた。私はあなたのものよ。ランドル……」

それはわたしが望んだ言葉だっただろうか。恐れた言葉だったのだろうか。

風が吹き抜けてゆく。百合の群れがざわざわと揺れている。

「……嘘だ」

わたしは彼女から後退りした。

「これはあなたが……」

「そんなはずはない！」

追いつがる彼女に背を向ける。

「でも、これはあなたがくれたのよ」

彼女はわたしにすがりついた。背中に押し当てられる熱い彼女の体。

わたしは振り返ることもできなかった。震えているのは彼女なのか。それとも……。

「これがあなたの願いだっただんでしょう？」

背中で顔を寄せた彼女が囁く。

違う。違う。そんなことは断じてない。わたしは目をつぶった。

「ずっと私にこうしたかったんでしょう？」

「そんなことは……！」

わたしは目を見開き、叫んでいた。

その声に驚いたのか、彼女は身を引いた。わたしから手を離すと身を翻して丘を駆け下りていった。

ドレスの裾が翻り、白百合がさざめく。足にまとわりつくそれを気にもせず、踊るようにして走り続けていた。背中で広がる栗色の髪。月の光が雫のように髪の上で跳ねている。

その光景に、わたしはのまれていたのかもしれない。追いかけるのが思いのほか遅れてしまった。

丘を下りきったところに彼女は立ち止まっていた。わたしもまた足を止める。

彼女の視線の先に、一人の男の姿があったのだ。見渡す限り白百合の中で、わたしたちに背を向け、月を仰いでいる。

男はゆっくりとこちらへ振り向いた。彼女へ向かって両手を広げる。迷いもせず、フィリアはその胸へ飛び込んでいった。月を背にした二人は一つの影のようだった。男の表情もその影に閉ざされ、まったく分からない。

「お前は……」

わたしは正体を見通そうと目を凝らす。わたしの目はどうかしてしまっただろうか。暗闇をも見透かす力はどこにいったのだ。

ようやく、その男が笑っているのに気づいた。白い歯をこぼし、わたしを見て笑っている。

『あなたに……』

笑いを含んだ男の声。その声は、幾つもの声が重なっているような不思議なものだった。

『彼女が守れますか？ 無力なあなたに……』

「なんだと？」

この男は、何者を前にしてそんな言葉を発しているのか、分かっているのだろうか。無知とは恐ろしいものだ。一人の人間が、夜のヴァンパイアを前にしてそんなことを口にするとは。

わたしは一步を踏み出した。押さえきれず、あふれ出してくる鬼気に、足元の百合がみるみると萎れていく。

フィリアを抱き寄せたまま、男はまだ笑いをもらしていた。

『自分が何者なのか思い知るといい』

厳かにさえ聞こえる声を耳にしたときだった。

変化が起こった。男の背後の暗闇が変質を始めたのだ。恐ろしいほどの勢いで、闇が溶かされていった。光が夜を押し上げている。そんな感じだった。

体が、細胞が悲鳴を上げ始める。恐ろしい苦痛が襲いかかる。

信じられない速さで陽が昇ろうとしていた。周囲が朝焼けの色に染まる。

わたしは耐え切れずに崩れ、膝を付いた。獣じみた呻き声が漏れる。

こみ上げてくる苦しさに、枯れた百合ごと土に爪を立てた。百合の群れは何の遮りにもならず、光はわたしを包み込んだ。赤く変色した皮膚はじりじりと縮み、焼け始めていた。

フィリアの瞳に映るのは、地獄の業火に焼かれる化け物だ。彼女

は男の腕の中で眼前の様子に、ただただ驚いていた。

二人の背後の丘から、太陽が姿を現し始めた。光は強さを増し、黄金色にきらめいていた。その圧倒的な力に、夜の一族であるわたしはひれ伏すしかない。

炎が上がり、苦痛は激しさを極め、わたしはとうとう悲鳴を上げた。凄まじい咆哮が夜明けの空を突き抜けた。

そして

わたしは目覚めた。息を乱し、冷や汗に濡れながら。

なんとというリアルさ。皮膚の焼ける鼻につく匂いもまだ残っているようだ。思わず手をかざし無事を確かめる。

ただの夢だ。わたしはベッドから体を起こした。いつものすつきりとした目覚めではなく、体がずしりと重かった。

辺りを見回し、自分の部屋であることを確認する。

そうだ。何も心配はいらない。ここに陽の光が差し込むなんて、ありえないことだ。

わたしは溜め息をついた。フィリアの元を去ったというのに、こんな夢を見るとは。夢の中で、わたしはまだ彼女を求めている。彼女を望んでいた。

そして、あの男が現れた。光の中でわたしを嘲笑ったあの男の正体は……。

わたしはかぶりを振った。そんなことはどうでもいいことだ。

そうして、自分に言い聞かせる。あれは夢でしかない。そう、所詮はただの夢なのだ。

フィリア4 (1)

ランドルの薔薇。その最後の一輪が花びらを落とすとした。

薔薇を失うと同時に、彼との繋がりも全て消え去ってしまったかのように思えた。それは、父を失って以来の喪失感だった。私自身があの頃の時分に戻ったようだ。

特に仕事が終わる夕暮れ時は、私を不安にさせた。独りで過ごさなければならぬ、あの部屋へ帰るのが嫌だった。通りを歩いていても、家族連れや肩を寄せ合っているカップルが否が応でも目に付いた。

私はかつての自分を慰めてくれた本に頼った。ストロークはよいアドバイザーだった。

彼の勧めで幾冊も本を手にした。それは彼の店であったり、図書館であったりした。本のインクの匂いがどれほど私を癒してくれたか。

そして、クレバー・ストローク。その穏やかな物腰や言葉が落ち着きを与えてくれた。彼への返事はまだしてはいなかったが、その態度は変わらなかった。せかすこともなく、待っていてくれた。その時の私は彼に甘えていたのだろう。それを思い知った。

そう、あれは今にも雨が降り出しそうな雲の厚い夜だった。かなり夜も更けていて、人通りもまばらになっていた。

私はストロークにマンションへ送ってもらおう途中だった。彼は面白い新刊書があるからと、しきりに私に勧めていた。

足音さえよく響いていた。彼の柔らかく細い声も簡単に聞き取れただけだった。

見えるのは黒い道路とそこに止められた車。道路の両脇の建物とそこから漏れる光。それくらいなものだった。

突然、女性の高い笑い声が聞こえてきた。響くヒールの音。五軒ほど先の角から、笑い声の主が飛び出してきた。街灯が作り出す光

の輪の中で、彼女は歩をゆるめ、後ろを振り返った。

再び笑い声その唇からもれる。

光がスポットライトのように降り注いでいる。二十歳そこその女性で、ミニのワンピースを着ていた。アップにした金髪がほつれ、肩に落ちかかっている。

別の重たい足音が響く。女性は再び走り出した。何度も後ろを振り返りながら。

その彼女を追う足音は男性のものだった。>br<女性とは違うゆっくりとした足取りで、光の中に入る。

黒髪の長身の男性。彼はいったん立ち止まり、まぶしげに手をかざして、女性のほうを見やった。

私はその姿に見覚えがあった。まさか、こんなところで……。果然と立ち尽くす私を見て、ストロークも立ち止まる。

再び歩き出した男性の姿は光の下から外れてしまった。

「ごめんなさい、先に帰っていて」

私はそう言っただけで歩き出す。振り返ることも忘れていたし、返事も待たなかった。

姿を消した男性を追いかけて、足を早めて、そしてついには走り出した。道路を横切り、建物の陰に隠れてしまった彼を追って。

何が起こったのか分からずに、茫然とするストロークを置き去りにした。

もうランドルと思しき姿は見えなかった。それでも、辛うじて足音だけは聞こえていた。

冷やかな風が音を立てて、十字の交差点を吹き去っていく。建物の間の路地が深い闇を作っていた。

頼りになるのは耳だけだ。

私は動悸打つ胸を押さえながら、立ち止まった。足音が途絶えたのだ。しばらく聞き耳を立ててみるが、再び音がすることはなかった。

ゆっくりと歩き出し、路地を覗いていった。街灯の届かない暗闇

に何度目を凝らしただろう。彼を本当に見失ってしまったのではないか。そんな恐れをいだき始めた頃だった。

覗き込んだ暗い路地。あるのは闇だけだ。私は身を引き、歩き出そうとした。

その時だった。何かの音を聞きつけた。音、いや、声だ。微かに聞こえる呻き声。それも女性の。

私は目を細めて、路地の奥を見極めようとした。人の気配。見えるのは、やはり闇だけ。その暗さに私は戸惑った。だが、それも数秒だった。

路地に足を踏み入れる。

次第に目が慣れてきて、両脇の煉瓦の壁がぼんやりと見えてきた。奥は行き止まりになっていているらしい。淡い光が壁の上部だけをぼんやりと照らしだしている。

何かが奥でわずかだが動いた。私ははっと立ち止まった。

慣れてきた目にぼんやりとした輪郭が映る。奥の壁にもたれるようにして、男女が抱き合っていた。

女性のほっそりとした腕は相手の背中をしつかりと抱きしめていた。男性の顔ははだけて見える彼女の左肩にうずまっている。女性の喘ぎ声。私はただならぬ思いを抱き始めていた。

「ランドル……」

私はそっと呟いた。独り言といってもいいくらいの声だった。

それでも、彼はそれを聞き取ったらしかった。顔を上げ、こちらを見る。女性の肌を伝わる血が見えた。

彼は威嚇するかのように、牙をむき出しにした。血で赤く染まった牙。瞳が一瞬、銀色をおびて光った。

彼は女性を振り払うようにして、押しやった。けだるげな彼女は地面にへたり込んだ。

ぼんやりとランドルを見上げている。恍惚の残り香が見える表情。「こんなこと……」

私の目は彼女に釘付けになった。ランドルではなく、彼女に。

薄いコートははだけ、ワンピースのボタンが外れている。首筋には牙の痕。その白い肌を汚す血の筋。そして、彼女の表情ときたら。今しがた彼の愛を受けたといわんばかりだった。

フィリア4 (2)

ランドルの身じろぎする音が聞こえた。地面と靴が擦れ合う音。私は彼へと視線を移した。

唇は結ばれていた。牙の見えない彼は本当に人間らしかった。

「フィリア……」

囁くような声。薄闇のせいで黒く見える瞳が私をとらえていた。

まるで善良な人間のように見えた。その唇の向こうに牙が隠されているなんて、誰が考えつくだろう。実際に目にした私でさえ、信じられないのだから。

一瞬、私は彼の唇を開き、牙を覗きたい衝動に駆られた。

ランドルの足元の女性が呻いた。顎を胸にうずめるようにしている。完全にほどけてしまった金髪が彼女の顔を隠していた。

「あなたは私にこんなことをしようとしたのね」

私は胸を押さえながら言った。掌で心臓の音を感じていた。

彼は傷ついたように唇を歪ませた。

「私は彼女と同じだったんだわ」

湿気を帯びた生温かい風が体にまとわりついた。

ランドルは喉を片手で押さえながら、地面に座り込んでいる女性を見た。そして、首を振る。めまいでも起こしたかのように、彼はきゅっと目をつぶり、眉をひそめた。

「他に何をしろって言うんだ。わたしの正体は話したはずだ」

ゆるぎない自信を感じさせる声。開かれた目が私へと向く。

「だからこそ、君はわたしを受け入れられなかったんだろう。当然だ。君は賢明だったんだ。わたしの方が愚かだったんだよ」

変わらない彼の声。初めて言葉を交わしたときと同じ声。それは私を混乱させた。

私は彼に触れたかった。彼の息遣いが感じられるまで近づきたかった。だが、間には広い空間があり、そこに壁でもあるかのように

私たちを隔てていた。

私は心の中で彼の名を呼んだ。何度も呼んだ。彼がその特別な能力で、私の心を見抜いてしまってもいいと思った。なのに、彼はそこに立ち、変わらない位置を保っていた。

ランドルは地面の女性へ近づいた。彼女は手を伸ばして、彼を迎えようとした。唇が微かに動いていた。彼の名を呼んでいるのだろうか。

それでも、彼はその手に触れようとしなかった。首筋に手をやり、血の流れる傷口を押さえる。女性は微笑んで、さらに彼に喋りかけようとした。

手を離れたランドルは、彼女にかまわなかった。身を引き、私を見る。いや、私を見ているわけでもなかった。彼の視線は私を通り越していた。私の背後の何かを見つめているようだった。

彼は歩き出した。傍らを通り過ぎていく。まるで私など存在しないかのように。

身動きできなかった。彼を視線で追うことさえできなかった。立ちすくみ、うつむいているだけだった。

足音が後ろに遠ざかっていく。ランドルは私から離れていこうとしていた。彼の後ろ姿が離れていく。私が振り向いたなら、それが見えるはずの話だが。

勇気がなかったのだ。振り返っただけで何かが起きるなどとは信じていないのに、できなかった。私がどれだけ彼をこの目で見たいと思っているところで。

そこには混沌とした恐怖があった。まるで母を亡くした後、毎晩出て行く父を前にしているようだった。父はいつ姿を消しても不思議ではなかったのだ。

だが、私は振り向いた。いや、正確には振り向かせることが起きたのだ。

声。私の名を呼ぶ声。それはランドルのものではない。私を呼んだのはクレバー・ストロークだった。

見ると、ランドルによって押さえ込まれていた。片手で胸を押され、壁に押し付けられているストロークの姿。恐怖で見開かれた目。ランドルの手を引き離そうと、両手で掴んでいる。

手についているのは、ただの壁だとも言わんばかりだ。無表情にランドルは彼を見つめていた。

ストロークの顔が苦痛に歪む。むせぶような悲鳴を耳にして、ランドルは感情を取り戻したようだった。はっと手を離す。ストロークはその場でしゃがみこみ、咳き込んだ。

ランドルは私を見、そして、再び彼を見る。背を丸める彼の腕を掴み、身体を起こした。

あまりにすばやい動きだったので、ストロークの頭が反り返りそうになった。彼の髪がくしゃくしゃになり、目にふりそそいでいた。それでも、彼はそれを払うことができなかった。

ランドルが彼の顔をじつと見つめていたのだ。視線で穴でも開けるつもりのように。ストロークは二、三言罵るように何かを口走っていた。すると、ランドルは何かをそつと話しかけ、それから彼に向かって微かな笑みを浮かべた。

ストロークは凍りついたようになった。牙を見たわけでもないだろうに。

ランドルは手を退け、彼から離れた。

通りは目の前だった。その姿は道路を照らす街灯の光を通り抜け、そして、闇に消えていった。

私は数秒は動けなかったと思う。ランドルの後を追って走り出したとき、その気配さえも感じられなかったのだから。ストロークの前を抜け、通りの見える路地の入り口で、私は彼が去ってしまったことを知った。

立ち尽くす私に、どれくらい経った頃か、ストロークが声をかけた。

「取り返しがつくなら、彼の元へいくべきだと思うよ」
彼は私の背後でそつと言った。

私は茫然としながら振り返った。彼の口からこんな言葉が出てくるなど、想像がつかなかった。

ストロークはいつもの優しい微笑を浮かべていた。ポケットをまさぐり、そこから取り出したものを私に差し出す。それはハンカチだった。

このとき初めて、自分の頬に伝わる涙に気づいた。そして、いつの間にか降り出した雨にも。濡れ始めた道路にも気づいた。

私はハンカチを受け取った。

「きつと、彼は僕たちのことを誤解していると思う。早く会って誤解を解くことだよ。でないと、本当に取り返しのないことになりかねないだろう」

私は涙をぬぐうこともできなかった。

「誤解だなんて……」

「君は彼を好きなんだろう。彼だって君を想っている。どこに問題があるというんだ。彼は僕に言ったよ。君と幸せになってほしいって。ただどね、君は彼を想っているじゃないか」

「いいえ、ストローク。私は……」

言葉に反して、身体が熱くなっていた。私はハンカチを握りしめた。

ストロークの頭や肩に降り注ぐ細かい雨。闇を背景に、雨は街灯の光に照らし出されていた。

私は彼の顔をまともに見れなくなった。彼は歩み寄り、私の両腕を掴んだ。そして、激しく揺さぶる。

「これで本当にいいのか？ これで君は満足なのか？」

いつもの彼に似合わず、声を荒立てていた。それで、私はますます気弱になってしまった。私の視線は、湿って黒い地面をうろつろとさまよった。彼は私から手を離れた。

「君に必要なのは彼だ。僕じゃない。僕は彼の身代わりにはなれない」

おさまっていた涙が再び溢れてきた。私は去ってしまったランド

ルと傍にいなながら繋がらないストロークのことを思った。

ストロークは私の孤独を癒す、ランドルの身代わりに過ぎなかったというのだろうか。

ランドルには何も声をかけられなかった私。何度かチャンスはあったのに、それを活かせなかった。たった一言でも良かっただろうし、傍に寄り添うだけでも良かっただろうに。私にはそのどちらもできなかった。

勇気がなかった。勇気。言葉にするとなんと簡単だろう。今までの私の運命を全て左右してきたものだというのに。

私は空を見上げた。涙にかすんだ雨が静かに落ちてくるのが見えた。私はストロークになんて失礼なことをしていたのだろう。彼の優しさにつけこんで、利用したのだ。

私は彼の上着を掴み、引き寄せた。泣きじゃくりながら、何度も詫びた。彼は私を責めはしなかった。それどころか、私の肩を叩きながら慰めの言葉をかけていた。

「君のせいじゃないよ」「彼とこそ幸せになるんだよ」……そんなことを、彼は何度も囁くように言っていた。

雨が次第に激しさを増す暗い通りで、私たちは恋人同士のように抱き合っていた。私は泣きながら。

皮肉なことに、このとき初めて、私は彼との交流を感じていた。

ランドル5

フィリアがわたしを捜している。

そのことを知ったのは、彼女に最後に会った雨の夜から、一ヶ月は経った頃だった。知らせてきたのは父であるナイトで、彼は事の顛末を語ってくれた。

「俺が、時間のあるとき、一晩のうちに何軒かのパブを回ることは知ってるよな。」

それはいつも同じ店というわけではないんだ。まあ、ロンドンのパブのことならまかせてくれ。

(長くなるので中略)

ある日、店のカウンターでバーマンと言葉を交わしていると、黒髪の女が仲間とともにやってきて、後ろの席に着いたんだ。

そして、驚いたことに彼女の話の中に、お前の名前が出たんだな。『私の友達が人を捜しているの。ランドル・ウエルボルンという名前で、黒髪、ブルーアイの男らしいわ。分かるのはこれだけなんだけど、誰か心当たりはない?』

彼女は仲間たちに話しかけていた。

まったく驚いたな。手にしていたグラスを落としそうになったよ。ファーストネームはともかく、ラストネームまで出てるんだぞ。しかも、それがこうも簡単に公の場で話されている。俺は少しばかり慌てて声をかけた。

『ランドル・ウエルボルンだった?』

背中を向けていた女は振り返った。金の輪っかのピアスを付けてたな。彼女はその店の常連客だった。名前は思い出せなかったが、何度かおごった覚えがあった。

『すまない。話が聞こえたもので』

『いいえ、かまわないわ。その人を知ってるの?』

『知ってるも何も……』

俺は言葉を濁して、彼女に隣に来るように示した。あまり大勢の前で話すべきではないと思ったんだ。

彼女はグラスを持って、俺の隣の席に座った。バーマンとは顔なじみで、“やあ、ルース”と声をかけられていたな。

『ずっと捜していたのよ。新聞にも出したけど、音沙汰なしだってもう駄目かと思いつめていたわ』

彼女はようやく見つけた興奮に黒い瞳を輝かせていた。

『で、その人とどういう関係なの？』

じれったそうに聞く。俺の答えはずいぶん遅いものだった。別にV字の襟から見える胸の谷間に気を取られていたわけじゃないぞ。本当の関係は言えるわけがないからな。人間の年齢の観念からは外れたものだ。

『……俺の弟だ。外見の特徴も合っているから、まず間違いはないだろうね』

彼女は、まじまじと俺を見た。お前の特徴から、兄として外れてないか見るためだったんだろうな。実際は親子だから外れようはないんだがな。

『それで、ランドルを捜しているのは誰なんだ？』

もちろん、答えは想像できたさ。だけど、念のためということだ。彼女はグラスからビールを一口飲んだ。その飲み方から、かなりいける口だと俺は読んだね。

『私の友達。フィリアって娘なんだけど、彼とどうしても話したいことがあるんですって。でも、連絡先が分からなくて困っているらしいの』

俺は黙り込んでしまった。お前たちの関係がどうなっているか、そのときは知らなかったからな。安易に返事をするべきではないと思っただ。

『あの……連絡先、分かりますよね？』

雰囲気の変化に気づいたのか、彼女は恐る恐るといった感じで聞いてきた。

「分かるが、教えていいものか。あいつがどう思ってるのかも分からないし。どうだろう、俺があんたの話をあいつに伝える。フィリアが捜してるって事をな。それで、あいつの方から連絡を取らせるっていうのは……」

今度は彼女が考え込む番だった。

「その人、フィリアの連絡先は分かるのかしら」

「あいつなら知ってる」

言い切る俺に、不思議そうな目が向けられる。

「あつ……、たぶんだけど。その名前、あいつの口から聞いたことがあるんだ。家に行ったことがあるとか。フィリアに聞いてくれ。きっと知ってるって言うから」

「でも、そんな不確かな情報、彼女に伝えられないわ」

正論だった。それでも、こちらの連絡先を教えるわけにはいかない。どんなにいい体つきで血が美味そうだとしてもな。

「ランドルには、必ず何らかの形で連絡をとらせるから」

「だけど……」

彼女はそれでも納得していなかった。まったく友達思いの娘だ。

そろそろ潮時だと思っただよ。これ以上話しても彼女を不審からせるだけだよね。お得意の暗示で切り抜けて、ここから去ろうと考えていた。

だが、そうはいかなかった。彼女が話を続けたんだ。

「私、どうしてもその人をフィリアに会わせたいの」

その言葉は熱に溢れていた。すぐるような目でこちらを見つめている。これほど他人のことに情熱を傾けられるなんて、あっぱれだとは思わないか。

「彼女、ずっとそのランドルって人を捜していたの。名前と特徴だけじゃ見つからない、もう諦めたらって何度か諭したけど、駄目だった。あの娘にあんな頑固なところがあるなんて知らなかったわ」
「彼女は微笑みを浮かべた。きつと、フィリアを目の前にしたときのことでも思い出していたんだろう。」

『君はフィリアとランドルの事を……』

『何も知らないわ。彼女話してくれないから。でも、特別な人だっ
てことは分かるわ。彼女を見てるとね』

その微笑みを俺は複雑な思いで見ている。このことをお前に話す
かどうか迷ったな。だけど、話さずにいて後々それが分かったとき、
お前がどう思うかと考えたら、自ずと答えが出た。

俺は席を立った。

『帰ってランドルに話してみるよ。早いほうがいいだろう。あいつ
がどう答えを出すかは分からないけどな』

慌てて彼女も立ち上がった。俺が逃げていくとでも思ったんだろ
う。

『俺を信じてくれ』

カウンターに置かれた彼女の手に触れて言った。暗示も何も必要
なかった。

一瞬の戸惑いの後、彼女ははつきりと頷いた。ほかに頼るものが
ないから仕方がないといった類のものじゃない。彼女は俺を信用し
てくれたんだ。

それで、そのまま家へ戻ってきたというわけだ。さあ、どうする
？ 選ぶのはお前だ」

ナイトは答えを待っている。

「少し考えさせてくれ」

わたしは静かに言った。彼は「そうか……」と短く答えた。

革張りのソファに座ったわたしに、ナイトは手にしていたものを
投げてよこした。膝に落ちたそれは、インクの匂いも薄れかけた三
週間前の新聞だった。

「お節介だな」

わたしは、身じろぎしてナイトを見上げた。

「あの娘との約束は守りたいんだ。それに恋の邪魔は本意じゃない。
それが本気ならなおさらな」

これまでの自分の態度など、忘れたかのような言い草だ。

目を細めるようにして、わたしの全身を眺め回した彼は、ふっと小さく息をついた。

「自分への罰か、彼女への見えない復讐か……」

独り言のような細い呟き。辛うじてそれを聞き取ったわたしは自分の体を見下ろした。襟をくつろげた白いシャツには皺が入っていた。黒いスラックスさえもよれてしまっている。

彼が何を言わんとしているかを感じ取ったが、非難する気は起きなかった。

トパーズ色の瞳に宿るのが哀れみなのか苛立ちなのか、今のわたしにとつてはどちらでもよいことだった。

「あんまり格好ばかりつけるんじゃないぞ。それで身を滅ぼしちゃ元も子もない」

周りのことを考えず、情熱だけで生きているような父だけには、言われたくない言葉だ。わたしは暗い目つきで彼を見つめるだけだった。

聞く耳を持たないわたしに業を煮やしたのか、それ以上何も言わずに彼は背を向けた。別段、引き止める理由などなく、その後ろ姿を黙って見送る。

扉が閉まり、ナイトは去っていった。そして、わたしは部屋に残っていた。

膝の新聞を見やる。パプの女性が話していた、これがその新聞なのだろう。これで人捜しとはフィリアも随分と古典的な方法をとったものだ。思わず笑い声を上げてしまう。

だが、彼女がわたしを捜している。自分の意志で、わたしに繋がるものを捜しているのだ。

何が彼女にそうさせているのか。彼女に何が起こっているのか。何か悪いことが……？

それはわたしの中で、細々と点るともし火が大きく揺らいで見せた瞬間だった。それを力づくで押さえ込もうとする。

発作のような笑いは治まっていた。代わりに残ったのは風を受け

た炭のように焦がれた思っただけだった。

今更どうしようというのだ。彼女の元から去ったこのわたしが…

手に取った新聞を握りしめる。くしゃくしゃになり、形を変えたそれを前のテーブルに投げやった。

狙いは定まらず、テーブルの端を掠めて、床に落ちる。傷ついた鳥が羽を広げ、地に伏したようなその形。

それを横目で見ながら、わたしは疲れに似た気だるさにとらわれていた。片手で顔を覆い、ソファに身を預ける。父の心配も何もかも、全てどうでもいいことのように思われた。

夜はまだ長い。食事にも出かけなければならなかったが、今はそんな気にはなれなかった。

ソファに包まれながら、ともすれば床へ行ってしまうような視線を引き剥がし、目をつぶる。そして、このまま朝が来て、眠りの時が来ても構わないと、ぼんやりとそんなことを考えていた。

ランドル・ウエルボンへ

至急連絡をください 待っています

フィリア・ノマ

(新聞の通信欄に載せられていたメッセージ)

フィリア5 (1)

『私は大丈夫。一人で生きてゆける』

それは幾度となく、自分に言い聞かせてきた言葉。寂しさを超えようと、自分を奮い立たせるために心に刻んできた。

母を亡くし、父が去ってから、何年も過ぎ、ようやく一人でいることを普通のこととして、受け入れられるようになった。再び誰かが必要とするなんて思いもしなかった。

そして、ランドルが現れた……。

自分の気持ちを知ったのは、彼と最後に会った雨の夜だった。それは今まで感じたこともないもので、私を迷わせ、苦しめた。認めることは、これまでの自分を否定することのように思われたのだ。私の中で何か音が立てて崩れていくのを感じた。

それでも、彼ともう一度会いたかった。話をしたかった。私を衝き動かしたのは、そんな強い思いだった。

ランドルに血を奪われたあの金髪の女性は、彼のことを何も知らなかった。

小雨が降り注ぐ路地の湿った地面から助け起こしたとき、彼女は軽い酩酊状態だった。ここまで来たのも、どうしてなのか分からないといった風だった。ランドルのことを聞こうとしても、誰かと一緒だったのかさえ覚えていなかった。

首筋に傷痕が残っているはずだったが、不思議なことに、きれいに消えていた。どうやったかは定かではないが、あのとき、彼が首に手を触れたとき、何らかの作用が働いたのだろう。

何も情報を得られずに落ち込む私に、新聞に載せては と言ってくれたのは、クレバー・ストロークだった。知り合いに記者がいるからと。

名前と髪の色、目の色くらいしか知らなかった私は、それに懸け

た。

彼が読んでいるかさえ分からない新聞。そして、彼自身にその気がなければ、私の前に姿を現すことはないのだ。そうは分かっていたが、私にはその方法しかないと思われた。

新聞に載ってから、一週間。それから、二週間が経った。彼からは何の連絡もなかった。

この頃から、私は最初に出会った場所や別れた場所に、毎晩のように足を運ぶようになっていた。それでも、もちろん彼を見つけないことはできなかった。

私は浮かない表情をしていたのだろうか。学校で、ルースが声をかけてきたのだ。

いつもなら、彼女の気遣いも受け入れなかっただろう。その時の私は疲れ始めていたのかもしれない。

私は人を捜していることを教えた。もちろん、それ以上のことは何も語らなかった。捜し人がヴァンパイアで……なんてことを話せば、正気を疑われるに違いない。

ルースは、熱心に耳を傾けてくれた。クレバーからどのような話がいつているのか、彼のことについては一言も触れなかった。ただ、「私も心当たりを捜してみるわ」とだけ、言ってくれた。

彼女の言葉はありがたかったが、この広いロンドンで、この間の……、クレバーのときのような偶然があるとは思えなかった。

それから、さらに二週間が過ぎた。新聞に載せたのも、ルースの好意も無駄に終わったように思われた。

毎日のように知り合いに声をかけてくれた彼女も、諦めた方がいいのではないかと諭し始めていた。それでも、私は聞き入れることができなかった。

そして、ある晩、それも深夜に突然電話が鳴った。

すでにベッドに入っただけぼんやりとしていた私は、飛び起きた。薄暗いリビングにある電話に向かって駆けて行き、慌てて受話器を取

った。

「フィリア、私よ」

飛び込んできたのは、女性の声だった。「どちら様ですか？」と口にしかけて気付く。

「ルース？」

後ろではざわざわとした人の声。そして、ジャズの音楽が流れている。ふと目に入った棚においてある時計を見ると、すでに一時を回っていた。

「彼と連絡が取れそうよ。さっき兄だという人に会ったの」

彼女は酔っているのか、興奮気味だった。私の問いかけに答えもしない。その早口に一瞬、話の理解が遅れた。

「彼に話してみるって。必ず何らかの形で連絡を取らせると言ってたわ」

思いもかけない言葉に、私は何も返すことができなかった。後ろで、ルースの友人たちなのか、誰かが騒いでいる声が聞こえる。

「ルースの友達の捜し人が見つかったことを祝って！」

乾杯のコール。

「もう、調子に乗りすぎよ」

彼女は後ろにいる者たちに向かって言った。彼らはどっと笑い声を上げた。

「とにかく、もう少し待ってみて」

「……ありがとう」

やっと搾り出した言葉。ルースは明るい笑い声をもらった。

「私も嬉しいわ。それじゃあね」

そうして、嵐のような電話は切れた。

受話器を戻して、考え込む。いまいち実感がわかなかった。傷つくのが怖かったただけなのかもしれない。彼に会えるのかもと希望を抱いて、それが叶わなかったときのことを恐れていただけなのかもしれない。

窓から差し込むうっすらとした月の光。窓枠が床に浮かぶ光を十

字に区切っている。窓に寄り、空を見上げると、欠けた月が薄い雲に覆われていた。その影はおぼろげで、私の不安を映しているかのようにだった。

「本当に……？」

私は呟いた。まるで、その月が答えを示してくれることを願っているかのように。

フィリア5 (2)

ルースの電話から幾日か過ぎた。それでもランドルからは何の音沙汰もなかった。

彼に話を通っているのか。いや、そもそも兄を名乗った男性が、本当に彼とつながりを持っている者なのか、確かめるすべは何もなかった。

それでも私は今夜もまた街へ出かけるのだ。ランドルを捜して

どれくらいの日にち続いただろう。数えることをやめて久しい。いつもの搜索をやめて、部屋へ戻ろうとしていた。そんな時、マンションの入り口で人影を見つけた。瞬間、心臓が跳ね上がるのを感じた。

背の高い男性の影。こちらを見つめる彼の視線。私の足は完全に止まってしまった。

壁に寄りかかっていた彼は、こちらに気づいているだろうに、じっとしたまま動こうとしなかった。

「ランドル……」

呼びかけた言葉は、ちゃんと声として発せられていただろうか。私には分からなかった。それでも彼はようやく体を起こし、優雅にも見える足取りで、こちらにやって来た。

薄手のグレーのコートに身を包んだランドル。彼がゆっくりと近づいてくる。それだけで私の心はひるんでしまいそうだった。

「久しぶりだな、……フィリア」

耳に心地良い彼の声。その声を聞いただけで心に細波が立つ。

彼は私の目の前で立ち止まった。

「少し痩せたか？」

濃いブルーの瞳にとらえられ、私は無防備な子供のように彼を見上げるだけだ。

街灯の光が辛うじて届く薄闇に立つ彼は、なんと優しげに見えることだろう。まるで、私を案じてくれているかのような錯覚を起こさせる。だからだろう、続く言葉に失望を隠せなかったのは。

「何の用だ？ 話があると聞いたから来たんだ」

その声はそれまで聞いたことのない、冷やかな響きを持っていた。

「ランドル……」

名前を呼んで、言葉に詰まる。

その時の私はどんな顔をしていたのだろう。彼は顔を背けた。道路を挟んだ向こうの歩道を一組の男女が歩いていった。

「悪いが、わたしも暇ではないんだ。用件を言ってくれ。あまりここには長居したくはないのでね」

肩を寄り添わせている二人に目をやりながら、ランドルは言った
「ランドル、私……」

どうして、こうも言葉が出てこないのだろう。彼に会えたら、話したいことは山ほどあったはずなのに。自分が震えているのが分かった。

「あの男とはうまくいつているのか？」

彼は、カップルが通り過ぎた風景を見ながら聞いた。こちらを振り返ることなく。その変わらない横顔を見ながら、私は首を横に振るだけで精一杯だった。

彼は私を見た。その顔には何の表情も浮かんでいなかった。ただ、瞳だけが心を映す窓のように、光を帯びていた。

「それが用件か」

吐き捨てるような呟き。

「あの男の居場所は何処だ？」

彼の顔に表情が戻った。その苛立ちは傍にいる私にも伝わった。圧倒されて、私は一歩後退りした。

「わたしがあいつと話をつける。それが君の望みなんだろう。君を託したわたしの責任でもあるわけだしな」

その怒りの矛先が、本来向かうべき私ではなく、クレバー・ストロークに向けられているのは明らかだった。ほとぼしり、溢れてくる感情。端正な唇は歪められ、白い牙が覗いて見える。

「ち……違うの……」

私は首を振りながら、呻くように言った。怒りの凝縮された瞳に捕まりながら、やっとの思いでつむぎだした言葉だった。

ランドルは燃えるような瞳で、私を見据えた。それでも、ここで口を閉ざすわけにはいかなかった。それはクレバーに危険が及ぶからという理由だけではなかった。

「私が駄目だったの。いけないのは私なのよ」

彼に向かって足を踏み出す。青い瞳が力を吸い取っているかのようだった。ほんの僅かな歩みだというのに、今にも崩れてしまいそうだった。

「ランドル、私は……！」

さらに近寄ろうとしたが、足がもつれて倒れそうになった。それを彼に助けられる。

腕に抱きとめられ、その顔を目の前にして私は再び言葉を失った。その瞬間、彼の瞳に浮かんでいたのは怒りではなかった。そこにあったのは……。

だが、それを確かめることはできなかった。体を起こし、私を立たせてくれると、彼はすぐに身を引いた。手を伸ばせば届きそうな距離であったのに、ずっと遠くに感じられた。

「そんなにあの男が大切か」

彼は呪いのように呟いて、それから天を仰いだ。雲がほとんどない今夜の空には、欠けるもののない月がかかっていた。それを見上げる彼の姿。それは最初の出会い　キルティンを親元に届けた後の時を彷彿とさせる光景だった。

彼は背を向けた。私から離れていく……。一步一步、遠ざかっていく。

これが最後なのだ。彼が私と会うことはもうないだろう。その姿

が霞んだのは、溢れてきた涙のせいだった。

「ランドル！」

私は声を上げ、駆け寄っていた。涙が弾けて消えていった。彼の背中を抱きしめる。

「行かないで。お願い」

それは懇願であり、叫びでもあった。彼は足を止め、驚いたように振り返った。

「フィリア……？」

困惑と懐疑の入り混じった声。私の手を解いて、こちらに向き直る。彼の瞳に自分の姿を映し出されるのが耐えられなくて、顔を見ることができなかつた。声さえ震えていたかもしれない。

「私、あなたのことが……。ずっと捜していたのよ、あなたを」

「しかし、君は……」

彼が動揺しているのが分かった。

「何を言っているのか分かってしているのか？ 君は……」

そう私は彼を拒んだ。

砕けた写真立てから全てが吹き出した夜。私が思いたけを打ち明けたあの夜……。

あれは彼が引き出したというよりは、私が彼に聞いてもらいたかつたのだ。彼は何もかもを知り、それでも私に向き合ってくれた。

それを受け入れることができなかつたのは、私が臆病だつたからだ。再び失うかもしれないという恐怖に耐え切れなかつたから。だが、今は違つ。

「何者であつてもいい。あなたに傍にいてもらいたいの」

そこに彼の正体は関係ないことだつた。私が望んでいるのは、ランドルそのものだつた。彼が毎夜のごとく人の生き血を貪っていたとしても。そのことが私の思いを止めることなどできはしなかつた。彼を形作っているものがヴァンパイアであるとするなら、私はそれを受け入れるだろう。

彼は黙つたままだつた。続く沈黙に不安になり、恐る恐る顔を上

げようとしたりしたときだった。ものすごい力で抱き寄せられ、胸に押し付けられた。

「わたしは……」

彼は呻くように言った。

このとき、その胸の内はどれほどざわめいていたのだろう。彼の思いを拒絶した私。それでも彼は私を愛している、幸せになってほしいと言ってくれた。

それでも、私は今まで自分の気持ちに正直になれなかった。それが彼をどれほど苦しめていたのか。

息苦しさ、めまいを覚えていた。気が遠くなりそうになって、ようやく彼は腕の力を緩めてくれた。

「フィリア……」

そんな私の様子に、彼は心配そうに覗き込む。

私は彼の腕を頼りながら、左手でニットの上着の襟を引っ張り、首を反らした。彼の目の前で首筋をさらしている。そして、その視線を熱いほどに感じて私は目を伏せた。

「あなたが望むなら、いいのよ。飲んでも」

それが私にできる最大の信頼の証だと思った。体の震えが伝わらなければいいと心から思った。

吐息が首筋にかかる。熱く、湿った吐息。近付いてきた唇が押し付けられる感触。その感覚に思わず身をすくめそうになる。

私はまぶたをぎゅっと閉じた。やがて、牙が私の首を傷つけるだろう。そうなっても決して悲鳴は上げない。そう心に決めて唇をかみしめた。

だが、彼は牙をたてることはなかった。強く首筋を吸っただけだった。

「ランドル……？」

彼が体を起こすのを感じて、私は目を開けた。穏やかな微笑みを浮かべる彼の姿がそこにあった。

「これで十分だ。わたしには」

「あつ……」

慌てて首を押さえる。もちろん、それでは分からなかったが、そこに赤い跡が残っていることは容易に想像できた。それは、借金取りが来た夜に付けられたのと同じもの。

そういう意味だったのかと、私は一人顔を赤らめた。そんな様子を彼が微笑みながら覗き込む。私は照れ隠しとばかりに、うらめしく彼を見上げた。

「またハイネックを着なきゃ」

「そうだろうな」

溜め息をつく私の顎を彼の手が持ち上げた。そして、彼は私にキスをした。優しく甘い恋人同士のキスを……。

ほのかな光をたたえる月が優しく照らし出すこの夜に、私たちの想いはひとつになった。

暗い影を落とす家々の狭間を知らないわけではなかったが、彼が見ているのは天にかかる月だけだった。その光を浴びながら、彼は柔らかな微笑みを浮かべるのだ。

その笑みに誘われて、私もまた天を仰ぐ。

美しく、円を描くその月は金色に輝いていた。私たちは、二人そろって、いつまでもそれを見つめ続けた。

〓 〓 F I N 〓 〓

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4397k/>

月下の恋人たち

2011年4月2日21時40分発行